福岡市

板付周辺遺跡調査報告書第21集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集

2000

福岡市教育委員会

福岡市

板付周辺遺跡調査報告書第21集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集

2000

福岡市教育委員会

序

福岡市は豊かな自然環境に恵まれ、地理的条件も加わり、古来より海外交流の拠点として栄えてきました。日本最古の農村遺跡の一つである板付遺跡、古代の対外交流の拠点・迎賓館である鴻臚館、貿易都市・博多など多くの歴史遺産があります。

福岡市教育委員会では、文化財の保存と保存措置に鋭意努めているところであります。しかし、都市化により変貌著しく、各種の開発事業によって失われてゆく埋蔵文化財も少なくありません。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正6年、当時、九州大学医学部教授であった中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年から日本考古学協会によって発掘調査が開始され、以後、明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へと引き継がれ、数々の大発見がありました。環濠集落、最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国史跡に指定され、平成7年には指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として広く市民に親しまれているところです。

本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。本書に収録したのは、住宅の移転改築に伴う、G－7a・7b調査区の日本で最も古い水田遺構より出土した遺物の報告であり、日本の歴史を解明するには欠かせない資料を提供しています。なお、G－7a調査区は平成11年度に国の史跡に追加指定される運びになりました。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘作業員、整理作業員等、多くの方々のご協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　　憲一郎

例　言

1．本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助金を受けて、昭和52年・53年に実施した福岡市博多区板付遺跡および周辺遺跡の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。本報告書に収録したのは、板付遺跡G－7a調査区、G－7b調査区の水田遺構の出土遺物の報告である。

2．本報告書に収録した発掘調査は、山崎純男、沢　皇臣、山口譲治、横山邦継が担当した。

3．本報告書に収録した写真の撮影には、山崎、沢、原　俊一、前田義人があたり、遺物写真は山崎がこれにあたった。

4．本報告書に使用した図面の作成には、山崎、沢、山口、原、前田、木下尚子、森瀬圭子があたり、一部、菅波正人の協力を受けた。図の製図は山崎がこれにあたった。

5．本報告書に使用した遺物の整理には久賀登世子、藤　アイ子、矢川みどり、小松原澄江があたった。

6．本報告書の図面の北はすべて磁北である。

7．本報告書の執筆は山崎がこれにあたった。

8．本報告書の編集は山崎純男がおこなった。

遺跡調査番号　7842・7843

遺跡略号　ITZ30・ITZ31

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
１．調査に至る経過……1
２．調査体制……2
３．板付遺跡周辺の弥生時代開始期の遺跡……5
第２章　G−7a・7b 調査区の概要……13
１．調査区の位置……13
２．G−7a 調査区の基本土層と遺構概要……15
(1)　基本土層……15
(2)　遺構概要……17
３．G−7b 調査区の基本土層と遺構概要……19
(1)　基本土層……19
(2)　遺構概要……21
第３章　遺物出土状況……22
１．G−7a 調査区・上層遺物出土状況……23
２．G−7a 調査区・中層遺物出土状況……26
３．G−7a 調査区・下層遺物出土状況……26
４．G−7b 調査区・上層遺物出土状況……26
５．G−7b 調査区・下層遺物出土状況……26
第４章　出土遺物……27
１．上層出土遺物……27
２．中層出土遺物……42
３．下層出土遺物……45
第５章　まとめ……61
１．土器編年の概要……61

挿 図 目 次

Fig.　1　板付遺跡の地形と各調査区……3
Fig.　2　板付遺跡と周辺の弥生時代開始期遺跡……5
Fig.　3　周辺遺跡の出土遺物Ⅰ……6
Fig.　4　周辺遺跡の出土遺物Ⅱ……9
Fig.　5　周辺遺跡の出土遺物Ⅲ……11
Fig.　6　G−7a・7b 調査区の位置……14
Fig.　7　G−7a 調査区基本層序……16
Fig.　8　G−7a・7b 調査区遺構関連図Ⅰ（板付Ⅰ式土器期）……17
Fig.　9　G−7a・7b 調査区遺構関連図Ⅱ（突帯文土器期）……18

Fig. 10　G−7b 調査区基本層序 ……20
Fig. 11　G−7a 調査区・上層遺物出土状況 ……22
Fig. 12　G−7a 調査区・下層遺物出土状況 ……23
Fig. 13　G−7b 調査区・上層遺物出土状況 ……24
Fig. 14　G−7b 調査区・下層遺物出土状況 ……25
Fig. 15　上層出土土器実測図 I ……28
Fig. 16　上層出土土器実測図 II ……31
Fig. 17　上層出土土器実測図 III ……33
Fig. 18　上層出土土器実測図IV ……34
Fig. 19　上層出土土器実測図V ……35
Fig. 20　上層出土土器実測図VI ……37
Fig. 21　上層出土土器実測図VII ……38
Fig. 22　上層出土土器実測図VIII ……41
Fig. 23　中層出土土器実測図 I ……43
Fig. 24　中層出土土器実測図 II ……44
Fig. 25　下層出土土器実測図 I ……47
Fig. 26　下層出土土器実測図 II ……49
Fig. 27　下層出土土器実測図 III ……51
Fig. 28　下層出土土器実測図IV ……52
Fig. 29　下層出土土器実測図V ……54
Fig. 30　下層出土土器実測図VI ……57
Fig. 31　底部実測図 ……58
Fig. 32　石庖丁実測図 ……60
Fig. 33　石庖丁出土状況 ……60
Fig. 34　G−7a・7b 調査区出土土器の編年 ……62

図 版 目 次

PL. 1　上層土器 I　大型の壺形土器（板付 I 式）
PL. 2　上層土器 II
(1) 壺形土器、浅鉢形土器（表）
(2) 壺形土器、浅鉢形土器（裏）
(3) 壺形土器他（裏）
PL. 3　上層土器 III
(1) 板付 I 式壺形土器
(2) 文様拡大
(3) 壺形土器他（表）
PL. 4　上層土器IV
(1) 壺形土器（表）左　夜臼 I 式土器

右　板付Ⅰ式土器

(2) 壷形土器（表）左　夜臼Ⅰ式土器

右　板付Ⅰ式土器

(3) 壷形土器（板付Ⅰ式）（表）

(4) 壷形土器（板付Ⅰ式）（裏）

PL. 5　中層土器

(1) 甕形土器

(2) 大型壷形土器

(3) 大型壷内の刷毛目痕

(4) 大型壷外面の籾圧痕

PL. 6　下層土器Ⅰ（器面調整）

(1) 貝殻条痕

(2) 貝殻条痕

(3) 板擦痕

PL. 7　下層土器Ⅱ

(1) 甕形土器胴部（表）

(2) 甕形土器胴部（裏）

(3) 壷形土器底部

PL. 8　下層土器Ⅲ

(1) 甕形土器、浅鉢形土器（表）

(2) 甕形土器、浅鉢形土器（裏）

(3) 甕形土器底部

PL. 9　下層土器Ⅳ（甕形土器）(1) 表、(2) 裏、(3) 表、(4) 裏

PL. 10　下層土器Ⅴ (1) 甕形土器、(2) 細部拡大、(3) 壷形土器胴部、(4) 甕形土器

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

板付遺跡は福岡平野のやゝ東に片寄った中央部に位置する。福岡市博多区板付２丁目から５丁目にかけての、中位段丘Ⅱ面の台地を中心とし、その周囲の沖積地を含んだ約80万㎡に広がる大規模な遺跡である。遺跡は弥生時代を中心とするが、一部に旧石器時代、縄文時代の遺物が発見されている。弥生時代以降は現代まで連綿と続く複合遺跡である。遺跡は古くから知られていて、江戸時代の終り頃、遺跡の中心部にあたる中央台地に所在していた通津寺境内から広形銅矛５口が発見されたことが、通津寺過去帳に記されている。大正時代末期には、通津寺の南東に存在した円墳状の高まりが土取りにあい、金海式甕棺とみられる前期末の甕棺群が発見され、数基の甕棺から細形銅剣・細形銅矛各３口が出土した。これを、当時九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎博士が学界に報告され、はじめて遺跡の重要性が認識された。この時出土した細形銅剣・銅矛は地元から東京国立博物館に提出され、現在も東京国立博物館に保管されているが、細形銅剣１口が増え、計７口となっている。この甕棺群が発見された円墳状の高まりの頂上部には板状の大石が建てられており、中山氏の報文からすれば、現在の知見からして、墳丘墓であった可能性が極めて高い。

また、第２次世界大戦後すぐに、地元の考古学研究者である中原志外顕氏によって通津寺境内近くの畑地より、縄文時代末期とみられていた刻目突帯文土器と弥生前期土器が共伴状態で採集された。これを受けて、昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。その成果は当初の発掘調査の目的を充分に果たすものであった。集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかになり、環濠内には多数の袋状竪穴（貯蔵穴）も検出された。濠や貯蔵穴内からは炭化米をはじめ、土器の器面に残された籾圧痕、収穫具としての使用が考えられる石庖丁、伐切具である太形蛤刃石斧、加工具である抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、あるいは武器である磨製石剣、磨製石鏃等の大陸系磨製石器、縄文時代終末期の刻目突帯文土器（夜臼式土器）と弥生時代初頭の板付Ⅰ式土器の共伴関係から、日本列島における最古の稲作農耕の存在が確認され、弥生時代最古の農村の姿を具体的にうかびあがらせることとなった。また、稲作農耕の放地は、共伴する大陸系磨製石器の形態から朝鮮半島に求められることが推測できるようになった。日本列島の歴史の中で、それまでの歴史を大きく変革させた重要な成果が得られたのである。

昭和40年代後半にはじまる日本列島改造による開発の急増は、板付遺跡、その周辺部においても例外ではなかった。遺跡の中心部をなす環濠集落をのせる台地西～北側の広大な沖積地に、市営・県営住宅団地の建設が進められたことをはじめ、周辺部でも宅地造成等の開発が進められた。これらの宅地造成に伴う緊急調査は福岡市教育委員会が担当して実施してきた。緊急調査に伴う発掘調査成果も重要なものであった。集落をのせる台地西側の沖積地では、弥生時代以降、現代までの全期間を通じて水田関連遺構が確認され、当時としては九州では数少ない木製農具をはじめとする木製品が多量に出土し、その内容は、弥生時代の農村の姿を如実に示すものであった。なお、遺跡の範囲がさらに拡大することが判明し、遺跡の重要性はますます高まることとなった。

昭和61年６月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落部分を含む遺跡の中心部と台地の西に隣接した沖積地の水田遺構部分の合わせて27,796㎡が国の史跡として

指定された。以後は指定地の買収が進められ、平成６年には、環濠集落と水田の一部が復原され、遺跡は保存・整備され、公開されている。

板付遺跡および周辺地域は、その歴史的な重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助金を受けて緊急発掘調査を実施してきている。本報告書に収録した昭和52・53年度の調査地区は、国史跡指定地内から、史跡保存のために指定地外へ転出するのに伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、史跡に隣接した地域の遺構・遺跡を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。

昭和52・53年度の緊急発掘調査は史跡指定地周辺の15地区を対象として実施した。この中で本報告に収録したのはＧ−7a・7b 調査区の調査概要と出土遺物の詳報である。Ｇ−7a・7b 調査区では、これまで弥生時代初頭とされていた板付Ⅰ式土器段階の水田遺構を検出したのみならず、さらにその下層から縄文時代晩期終末とされていた刻目突帯文（夜臼式）土器単純層が確認され、その下面に同時期の水田遺構を検出した。この発見は、日本列島における水稲農耕の開始期を縄文時代晩期終末まで遡らせただけでなく、縄文時代・弥生時代という考古学の年代区分まで問題にするところとなり、マスコミによって大きく報道された。本報告に収録した遺物は上記の年代を如実に示すものである。弥生時代開始期の遺物に検討を加えてみたい。

なお、昭和52・53年度調査地区の概報は『福岡市板付周辺遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告書(5) 1977〜78年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、1979年として発刊している。また、正式報告書は『板付周辺遺跡調査報告書第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集、1997年、において Ｆ−5a 調査区、Ｆ−5b 調査区、Ｆ−6a 調査区の３ヶ所を収録、『板付周辺遺跡調査報告書第19集』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集、1998年、において、Ｆ−5c 調査区、Ｆ−7a 調査区、Ｆ−7b 調査区、Ｆ−8c 調査区の４ヶ所を収録。『板付周辺遺跡調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集、1999年、において、Ｇ−7a 調査区、Ｇ−7b 調査区、Ｇ−7c 調査区、Ｆ−8c 調査区の４ヶ所の遺構編を収録している。本報告書はＧ−7a 調査区、Ｇ−7b 調査区の出土遺物を収録した正式報告書である。

２．調査体制

おりからの列島改造に伴う開発事業の急増により、埋蔵文化財の緊急発掘調査件数が大幅に増加し、教育委員会文化課埋蔵文化財係では、緊急発掘調査に対応する体制をとることができない状況下におちいった。文化課ではその対応策として、急拠、板付遺跡の調査に従事していた板付遺跡調査事務所と埋蔵文化財係を合同させた調査体制を組み、市内遺跡の緊急発掘調査に備えることとなった。昭和52・53年度の市内遺跡の緊急発掘調査の内、当班が受け持った発掘調査は、板付遺跡および周辺遺跡の15ヶ所、有田・小田部遺跡の３ヶ所、神松寺御陵古墳・神松寺遺跡の計19ヶ所である。有田・小田部遺跡、神松寺・神松寺御陵古墳については、すでに報告書を刊行しているので、詳細は下記の報告書によられたい。

『神松寺遺跡−弥生時代住居址と前方後円墳の調査−』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978年
『有田・小田部第６集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985年
『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集　1994年
『有田・小田部第23集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集　1996年

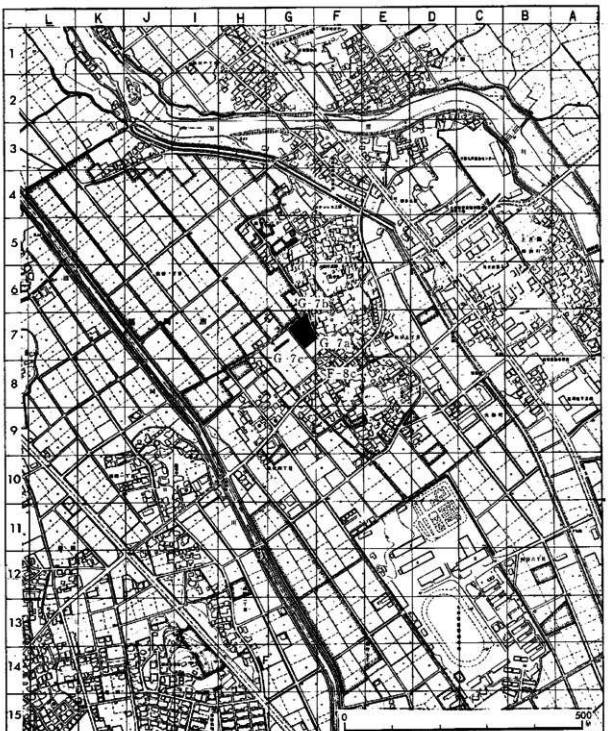


Fig.1　板付遺跡の地形と各調査区

調査体制

調査地区　福岡市博多区板付２丁目～５丁目
調査期間　1977（昭和52）年５月11日～1979（昭和54）年１月20日
調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係・板付遺跡調査事務所
調査関係者
　調査指導委員
　　岡崎　敬（九州大学文学部教授、故人）
　　横山浩一（九州大学文学部教授、現・福岡市博物館顧問）
　　森貞次郎（九州産業大学教授、故人）
　　三島　格（福岡市教育委員会文化財専門員、現・肥後考古学会会長）
　　藤井　功（福岡県教育委員会文化課長、故人）
　　下條信行（九州大学文学部助手、現・愛媛大学文学部教授）
　　後藤　直（福岡市立歴史資料館、現・東京大学大学院教授）
　福岡市教育委員会
　　教育長　　戸田成一（当時）　西憲一郎（現）
　　文化部長　　志鶴幸弘（当時）
　　文化財部長　　柳田純孝（現）
　　文化課長　　清水義彦　井上剛紀（当時）
　　埋蔵文化財課長　山崎純男（現）
　　埋蔵文化財係長　三宅安吉（当時）
　　板付遺跡調査事務所長　楢崎幸利（当時）
　　調査第１係長　山口譲治（現）　調査第２係長　力武卓治（現）
　　庶務・会計　安田正義　河鍋好輝（当時）、宮川英彦、谷口真由美、河野淳美（現）
　発掘調査担当
　　山崎純男（埋蔵文化財係、現・埋蔵文化財課長）
　　沢　皇臣（板付遺跡調査事務所、現・宮崎県考古学会）
　　山口譲治（板付遺跡調査事務所、現・埋蔵文化財課調査第１係長）
　　横山邦継（板付遺跡調査事務所、現・埋蔵文化財センター主任文化財主事）
　調査補助員
　　原　俊一、前田義人、奈良崎和典、森瀬圭子、小野由美子、村上順子、伊崎俊秋、木下尚子、
　　田口真理、久保智康、山田威洋、市橋重喜、松永幸男、為貞由紀、速見信也、谷　豊信、
　　出利葉浩司、福岡大学歴史研究会諸氏
　整理作業員
　　久賀登世子、藤　アイ子、矢川みどり、小松原澄江

3．板付遺跡周辺の弥生時代開始期の遺跡

先の『板付周辺遺跡調査報告書第20集』1999年では、玄界灘に面した早良、福岡、粕屋の各平野における弥生時代開始期の遺跡分布を概観した。本稿では、さらに的をしぼり、板付遺跡周辺における開始期の遺跡分布を詳細にみてみよう。同地域は最近の発掘調査の進展により、その内容は10年前からすると霊泥の差がある。

板付遺跡の周辺で最も早くから知られていたのは、諸岡遺跡であり、次いで、板付遺跡の北側下流域の那珂君休遺跡、また、最近、板付空港内の西側において国際線ビルディング建設により雀居遺跡が発見され、自然堤防上に同時期の有力な遺跡が調査された。また空港東側の月隈丘陵裾部において天神森遺跡が調査され、同時期の有力な墳墓群が調査された。同様の墳墓群は同じ月隈丘陵の大野城市の中・寺尾遺跡や御領前ノ縁遺跡等がある。以下、これらの遺跡を詳細にみていこう。

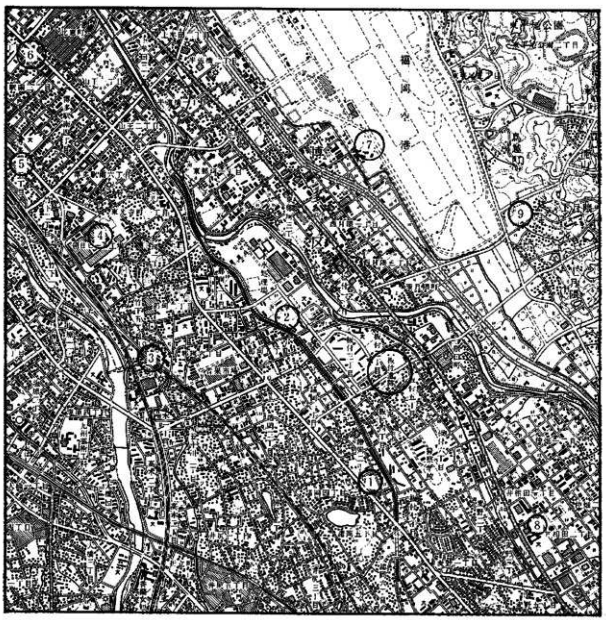


Fig.2　板付遺跡と周辺の弥生時代開始期遺跡

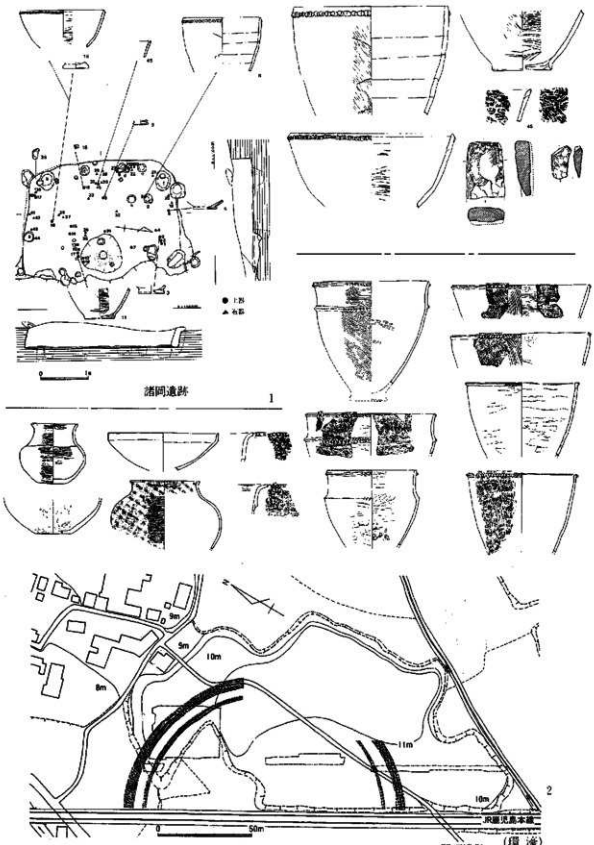


Fig.3 周辺遺跡の出土遺物Ⅰ

①諸岡遺跡 F・G 区（Fig. 3－1）（遺跡番号は Fig. 2 の番号と一致する）

諸岡遺跡は板付遺跡の南西約700mに位置する独立丘陵を中心とした旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。東斜面裾部から沖積地にかけて刻目突帯文土器段階の遺構と出土遺物がある。F 区は丘陵裾際の沖積地に立地し、1975年、事務所建設に伴い緊急調査が実施された。また、G 区は道路をへだてた西側の丘陵東斜面に位置し、1979年、住宅建設に伴い緊急調査が実施された。共に刻目突帯文土器単純期から板付Ⅰ式土器の共伴する時期の遺跡である。G 区では方形（？）の竪穴住居址、袋状竪穴含1基が検出されている。竪穴住居址は方形プランをなすと考えられるが、東半部が後世の溝によって破壊されている。西壁長3m、床に地床炉があり、炉址が中央部にあると仮定すれば、東西長は3.6m前後になり、四隅に主柱穴をもつ隅丸長方形プランの竪穴住居址が復元される。埋土中からは刻目突帯文土器が単純に出土している。また、竪穴住居址の西側に約12m離れて保存良好な袋状竪穴（貯蔵穴）1基が確認されている。埋土からは刻目突帯文土器を主体に、数片の板付Ⅰ式土器が出土している。なお、G 区から北に約450m離れた丘陵斜面には板付Ⅰ式土器段階から始まる前期の袋状竪穴（貯蔵穴）群が調査されている。

F 区は標高3.3mの沖積地に位置する。層位は、水田耕作土・床土の下に、部分的に褐色砂層が拡がり、その下位に、黒色粘土層、青白色粘土層、青灰色砂層と続いている。遺物包含層は褐色砂層と黒色粘土層であるが、主に黒色粘土層に遺物量が多い。黒色粘土層は厚いところで73cmを有し、凹地に堆積した状態を示している。出土遺物には土器と石器がある。出土土器には数点の板付Ⅰ式土器が混在するが、ほぼ刻目突帯文土器の単純である。刻目は太目のものと小さいものと2種ある。また、突帯をもたない粗製の深鉢形土器がある。太目の刻目突帯文土器、粗製深鉢形土器は山の寺式土器の特徴をもち、胎土等が異質であることを考慮すると、他地域からの搬入品である可能性が強い。注目すべき現象である。石器には扁平片刃石斧、磨製石斧片、打製石鏃、尖頭状石器、掻器、削器、剥片石器、砥石、石核等がある。

山口譲治編『板付周辺遺跡調査報告書(3)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　1976年

柳沢一男、横山邦継編『板付周辺遺跡調査報告書(6)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980年

②那珂君休遺跡

板付遺跡の北部沖積地に位置している。埋没した台地上に夜臼・板付Ⅰ式土器の包含層が確認されている。出土土器は甕形土器を主体に、一部壺形土器がある。周辺部に集落等の存在が想定できる。板付遺跡西側沖積地に展開する水田遺構の中で、古諸岡川の左岸に位置している。板付遺跡周辺の開墾の状況を知るためには、今後、注意すべき遺跡である。

小畑弘己『那珂君休遺跡Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集　1989年

③那珂環濠遺跡（Fig. 3－2）

板付遺跡の西1.3kmの那珂台地（中位段丘Ⅱ面）の西台地際に位置している。青果加工工場建設に伴い、1992年に発掘調査が実施された。調査では刻目突帯文土器単純期とされる二重の環濠の一部が確認された。環濠の外側の濠（SD－01）は断面形がＶ字形をなし、検出時の幅4～5m、深さ1.6～2.1mを測る。内側の濠（SD－02）は断面形が逆台形をなし、幅1.4～2.0m、深さ0.6～0.8mを測る。二条の濠はＡ調査区で5m、Ｂ調査区で6m離れて並行している。SD－01は35m、SD－02は47mを確認している。環濠の規模はSD－02の内径約125m、SD－01の外径が約150mほどに復元される。また、同地は削平が著しく、削平部を復元するとSD－01が幅約6～7m、深さは約4mに、SD－02が幅約3.5m、深さ約2.3～2.5mになり、SD－01と02の間は3m以下になる。

SD－01、02からは Fig. 3－2 に示すような遺物が出土している。SD－01・02共にほぼ刻目突帯

文上器の単純であるが、SD－01には数点の板付Ⅰ式上器が混在している。板付遺跡とほぼ同時期の環濠が確認された意義は大きい。

吉留秀敏編『那珂11－二重環濠集落の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第366集　1994年

④那珂遺跡（アサヒビール工場内）

板付遺跡の西北西約２kmの那珂台地の西端部に位置している。アサヒビールの工場の建て替えに伴い敷地内が全面的に調査され、各時代の遺構、遺物が確認された。台地上に弥生時代開始期の貯蔵穴、旧・谷部に同時代の遺物包含層が確認された。刻目突帯文土器と板付Ⅰ式土器、板付Ⅱ式土器が共伴状態で出土している。竪穴住居址等は確認されていないが、周辺部に、当該期の集落の存在が想定できる。

山口譲治編『那珂５－第10～12・14・16・17・21次調査報告－』福岡市埋蔵文化財報告書第291集、1992年

⑤春住遺跡（比恵遺跡群）

板付遺跡の北西約2.4kmの那珂台地西端部に位置し、④の那珂遺跡とは約500ｍ離れた北西部に所在する。1967・69年、県道博多駅・竹下線に伴い、民間研究団体によって立会調査され、1979年、住宅建設に伴う緊急調査が実施されている。刻目突帯文土器と板付Ⅰ式土器共伴期の貯蔵穴が検出され、刻目突帯文土器、板付Ⅰ・Ⅱ式土器と若干の石器が出てきている。周辺部に当該期の集落が想定できる。

筑紫野史学研究会『見捨てられた春住遺跡』1972年

柳沢一男編『比恵遺跡－第８次調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集　1985年

⑥瑞穂遺跡（比恵遺跡群）

板付遺跡の北西約３kmの那珂・比恵台地の北端部に位置する。春住遺跡とは北に約500ｍ離れている。1979年、日本住宅公団のアパート建設に伴い緊急調査が実施された。遺跡は台地部と谷部を含み、弥生時代開始期の遺構として、台地部で袋状竪穴、谷部で当該期の水田遺構が検出されている。袋状竪穴からは多量の炭化米、アワ等が検出され、栽培植物の実態が改めて明らかになった。谷部では木製農耕具が出土し、当時の農具の構成を知ることができ、水田遺構との関連で興味深い。刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器・石器が共伴状態で出土している。集落の存在が想定できるが、竪穴住居址等は発見されていない。

吉岡完祐他『瑞穂－福岡市比恵台地遺跡－』日本住宅公団　1980年

⑦雀居遺跡（Fig．４）

雀居遺跡は福岡国際空港内の南西部端に位置している。板付遺跡の北約1.2kmの地点で、御笠川右岸の沖積地に立地している。遺構は地表から1.5～２ｍ下った標高4.5～5.0ｍのシルト質土の沖積微高地上に分布している。空港整備事業に伴い1992年～1998年度にかけて発掘調査が実施された。弥生時代開始期から中世にかけての複合遺跡であり、保存状態が極めて良好であり、各時代の重要な遺構・遺物が出土している。

弥生時代開始期の遺構は弥生時代後期の環濠と切り合い、調査区内を蛇行して北流する自然流路（？）（SD－003）の他、径４～５ｍを測る不整形の土坑、貯蔵穴、溝状遺構等がある。竪穴住居址の検出はないが、これらが集落の一端を構成しているのは疑いなかろう。また、蛇行しながら北流する水路 SD－003は、弥生時代開始期の多種多様の遺物を多量に出土しているが、その状態からみて、水田の水路である可能性が強い。

出土遺物には、土器、石器、木製品があり、その量は莫大で、重要なものが含まれる。出土遺物は

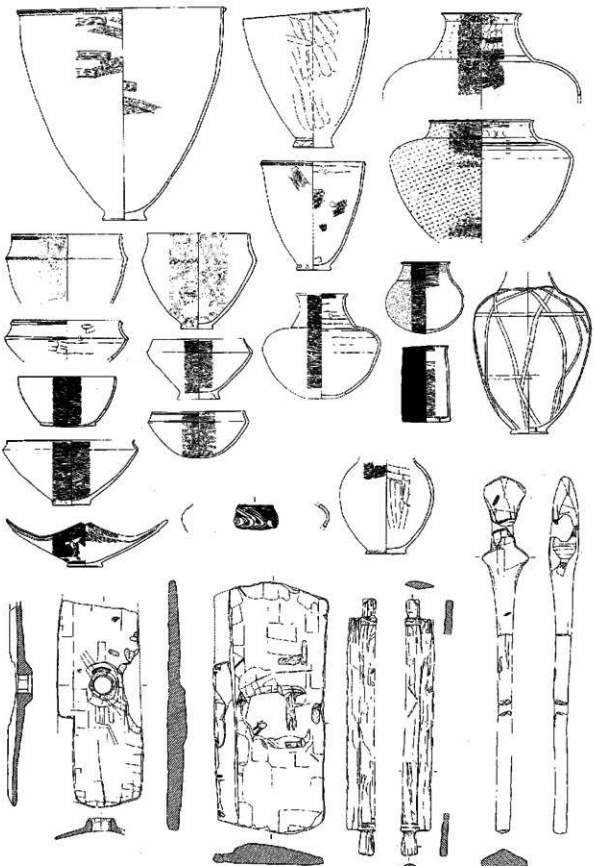


Fig.4　周辺遺跡の出土遺物Ⅱ

Fig. 4 に示した。土器は検出された各遺構から出土している。刻目突帯文土器をはじめ、板付Ⅰ式土器、板付Ⅱ式土器がみられる。SD－003の出土土器を観察すると、刻目突帯文土器単純期と板付Ⅰ式土器共伴期の二者が含まれている。また、休岩里タイプの朝鮮無文土器と東日本の大洞Ａ式土器が搬入品として共伴していることは、それぞれの併行関係を知る上で重要である。器種は甕・壷・鉢・浅鉢・高杯が基本形であるが、筒形をした特殊な器形も見られる。石器には磨製石鏃、打製石鏃、石庖丁、石鎌、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、磨製石斧、太形蛤刃石斧、砥石、石錐等と、それらの未製品がみられる。SD－003出土品中には縄文系の磨製石斧が柄に装着された状態で出土していて注目される。木製品には諸手鍬、平鍬・鋤共に２種類、エブリ等の農耕具と同未製品、石斧の柄、竪杵、把手付容器、槽、漆塗りの弓、白木弓、漆塗り竪櫛、紡織具の緯打具、建築材等がある。

出土遺物の土器、石器、木製品は質、量共にすぐれており、今までの弥生時代開始期の遺物の欠を補完して余りあるものである。構成等を知る上で貴重である。

下村智編『雀居遺跡２－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集　1995年

松村道博編『雀居遺跡３－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集　1995年

⑧井相田遺跡

板付遺跡の南東約２㎞の沖積地に位置している。福岡市埋蔵文化センターの増築工事に伴ない、1995年に緊急調査が実施された。調査では長方形土坑（貯蔵穴？）から、弥生前期土器を伴ない刻目突帯文土器が出土している。また、自然流路からも流れ込みの状態で、刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器を含む前期土器が出土している。なお、隣接した大野城市の仲島遺跡からも、かなりの数の刻目突帯文土器、前期土器が出土しており、両地点を含めた周辺部に当該期の集落の存在が想定される。同地域は御笠川左岸の沖積地で、雀居遺跡同様の埋没微高地の存在が想定できる。

大庭康時編『井相田Ｃ第６次－井相田Ｃ遺跡第６次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集　1997年

⑨下月隈天神森遺跡（Fig. 5－1）

福岡空港最南端の東側に横たわる月隈丘陵の一支脈の裾部に立地する墓地遺跡である。板付遺跡の東北東約1.5㎞、雀居遺跡の東約1.3㎞の所にあたる。標高11ｍ前後で、沖積地との接点にあたる。都市計画道路・高木月隈線建設に伴い緊急調査が実施された。遺跡は弥生時代開始期の木棺墓、弥生時代前期～中期にかけての甕棺墓が大半を占める墓地で、一部、古代の土坑、溝、中世の竪穴が認められる複合遺跡である。

木棺墓は隅丸長方形の短径約１ｍ、長径２ｍ前後の規模の掘り方をもち、その中に木棺を安置するものであるが、木棺の痕跡を残すものと、残さないものがあるが、掘り方の形状やその他の理由から、痕跡を残していないものも木棺墓であった可能性が強い。木棺墓は西側へ緩やかに傾斜する丘陵斜面の裾近くに、傾斜に平行して配置され、幅４ｍ、長さ30ｍの範囲に計23基が整然と二列に並んでいるが、列の南と北の端で、木棺墓に重複が認められる。なお、北側は道路によって発掘区が限られているので、判然としないが、遺構配置の状況からは、木棺墓の列は延長しそうである。二列の木棺墓間は北西部で２ｍ、南東部で１ｍ弱の間隔を有しているが、その空間には墓道や祭祀遺構等の特別の遺構は認められない。23基の木棺墓のうち、２基の木棺墓上に配石が認められる。墓標であろうか。これらの木棺墓のほとんどに１～数個の副葬小壷が認められる。出土状況から、これらの小壷はいずれも棺外副葬である。小壷の示す時期は板付Ⅰ式～Ⅱ式におよぶものであるが、その変遷については、

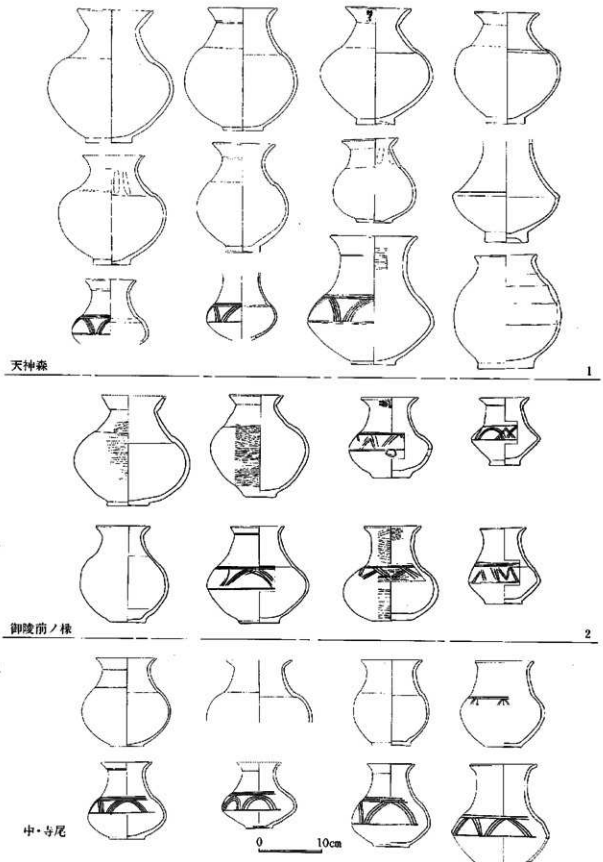


Fig.5 周辺遺跡の出土遺物Ⅲ

今後、検討する必要がある。小壷の保存状態が良好でなく、表面の観察が充分にできないが、黒色顔料や赤色顔料を残すものがあるので、いずれも彩文土器であった可能性が強い。同様の小壷は甕棺の棺外副葬品としても存在する。木棺墓と甕棺墓の先後関係をみると、重複するものは、いずれも甕棺墓が木棺墓切っていて、全体に甕棺墓が後出であるが、小壷には差が見い出せないものがあり、一部は同時併存と考えることができる。甕棺墓は計44基があるが、時期、埋葬の方向が異なる4基を除いて、いずれもが前期に属し、しかも棺として使用されるのは壷である。木棺墓と甕棺墓の差異が何に起因しているかは明らかではないが、今後、検討する必要があろう。副葬小壷、甕棺からみて、この墓地の主体は板付Ⅰ式～Ⅱ式土器の段階に形成されたものである。同様の墓地は本遺跡の南にも点々と存在する。立地は本遺跡と同様月限丘陵の派生支脈上である。大野城市の御陵前ノ縁遺跡や中・寺尾遺跡はその代表遺跡である。御陵前ノ縁遺跡では土壙墓1基、甕棺墓19基が調査され、9基から副葬小壷が出土している。いずれも、板付Ⅰ式～Ⅱ式土器の範疇にはいるものである。中・寺尾遺跡では数次におよぶ調査が実施されている。七壙墓、木棺墓、甕棺墓からなる前期の墓地で、時期により墓域の移動が認められる。土壙墓、木棺墓からは板付Ⅰ式～Ⅱ式に相当する副葬小壷が出土している。

これらの墓地に伴う集落は、いまだ明らかでないが、今後、沖積地の調査が進めば、雀居遺跡のように埋没微高地上に集落が発見される可能性は高い。最近、調査が進められている下月隈遺跡でも刻目突帯文土器が出土しつつあり、天神森遺跡に対応する集落が発見される可能性が高い。

松村道博編『下月隈天神森遺跡Ⅲ－都市計画道路福岡空港線・高木下月隈線建設に伴う埋蔵文化財調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集　1996年
尚　直也編『御陵前ノ縁遺跡』大野城市文化財報告書第48集　1997年
浜田信也、酒井仁夫編『中・寺尾遺跡－福岡県筑紫郡大野町中所在甕棺・土壙墓群発掘調査報告－』大野町の文化財第三集　1971年
馬田弘稔編『中・寺尾遺跡－福岡県大野城市大字中字寺尾所在遺跡調査報告書－』大野城市文化財調査報告書第1集　1977年
渡辺正気・小田富士雄「筑紫郡大野町発見の古式弥生土器」『九州考古学』15　1962年

以上の諸遺跡の他、最近調査された東那珂遺跡や下月隈遺跡で、刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器が発見されている。板付遺跡を中心に遺跡分布をみると、半径1㎞の中に、諸岡・那珂君休・高畑・下月隈の四遺跡が存在し、半径2㎞の範囲には上記遺跡に加えて、天神森・雀居・東那珂・那珂環濠・五十川赤月・井相田（仲島）・宝満尾の7遺跡が加わる。さらに、半径3㎞に拡げると瑞穂・春住・那珂・口佐・御陵前ノ縁の5遺跡が加わり、板付遺跡を中心に同時期の遺跡が同心円的に分布していることが察知できる。各遺跡はほぼ1㎞の間隔を有し、規則的な分布状態を示している。昭和初期の図面に遺跡分布をのせると、ほぼ当時の集落と重なりあう。このことは、福岡平野における開田事業が、稲作伝播の当初から、かなりのスピードでおこなわれたことを示している。

第２章　G－7a・7b調査区の概要

１．調査区の位置

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央より、やゝ東に片寄った御笠川左岸の中位段丘と沖積地に位置している。現在の海岸線から約７km内陸部にはいり込んでいるが、当初は海岸部砂丘の内側のラグーンが奥深くはいり込み、当時の海岸部からそう遠くは離れていなかったと思われる。

板付遺跡は、集落・墓地をのせる台地を中心に、台地の東西の沖積地に水田遺構が広がる拡大な遺跡である。ただし、水田遺構の主要な地域は西側沖積地である。台地部は中位段丘Ⅱ面にあたり、南北に細長く、長さは約500m、幅100～200m、現在の水田面からの比高は約１～３mであったが、現在は周囲の水田が埋められ宅地化しているので、ほとんど識別することはできない。丘陵には２ヶ所にくびれがあり、大きく三つの台地に分かれ、南の二つの台地にはそれぞれ頂部がある。北の丘陵は削平のため当時の状況は明らかでない。G－7a・7b調査区の環濠が掘削された中央台地の南西部沖積地に位置している。史跡指定地の南西部コーナーとは県道505号線をはさんで対角線上にある。環濠南側の台地の西に隣接した沖積地で、『板付周辺遺跡調査報告書第19集』で報告したF－7b調査区、F－7d調査区の市道をはさんだすぐ西側の台地際の水田地帯の一角を占めている。G－7a調査区とG－7b調査区は県道505号線をはさんで南北に相対しているが、もともとは一筆の水田区画内であった。水田の標高は約９mで台地部との比高差は現状で１～３mを測る。本調査区は博多区板付５丁目２－２外に所在している。

G－7a調査区とG－7b調査区を分断している県道505号線部分は、1976年に発掘調査が実施され、既に報告書が刊行されている。(沢　皇臣『板付－県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第48集　1978年）その成果は注目すべきものであった。発掘所見は、現水田面下に弥生時代中期～中世の遺物が混在した粘土層があり、その下は、弥生時代前期の遺物包含層となっている。上部では板付Ⅰ式土器と夜臼式土器が共伴するが、板付Ⅰ式土器が多く、夜臼式土器は少ない。下部では、上部と同様に板付Ⅰ式土器と夜臼式土器が共伴するが、板付Ⅰ式土器は少なく、夜臼式土器が集中して出土するというものであった。ただし、発掘区がせまく、湧水が激しいため、その詳細は不明な点が多い。G－7a調査区、G－7b調査区の調査はその欠を補うことを目的として開始した。

G－7a調査区は水田として利用され、G－7b調査区は既に埋められ宅地化していたが、基本的な層位は同じである。表土層の水田耕作土を除くと、酸化鉄、マンガンが沈殿した水田床土となり、その下は厚い黒灰色の粘土層となっている。この層はいわゆる土器層となっており、ほとんどが土器等の遺物で占められ、土は少ない。このような状態は台地際が顕著で、台地から離れると遺物は少なくなり、水田区画の中ごろでは、ほとんど遺物はみられなくなる。この状況から、これらの遺物は台地上から流れ込んだものであることがわかる。この層に含まれる遺物の年代は弥生時代中期～中世におよんでいるが、層位的に古いものが下に、新しいものが上にあり、層的には正常である。このことは、いったん堆積したものが、何らかの原因で流れ込んだものでなく、生活の過程の中で常時落ち込んで堆積したものと考えられる。土層中には処々に砂層が介在しており、流水によって土砂が流され、重量のある遺物が隙間なく堆積していったものと考えられる。遺物の量は莫大で貴重なものも多い。この土器層から出土した代表的な遺物として、青銅器（広形銅矛）鋳型、銅鏃、編物や太形蛤刃石斧、

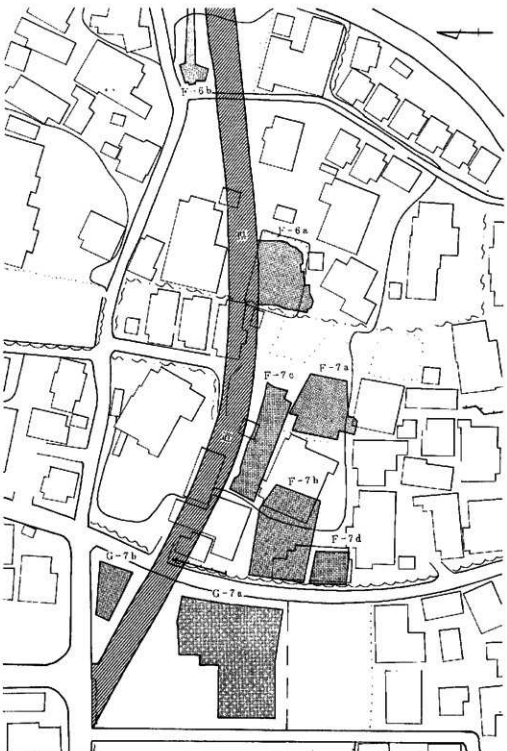


Fig.6 G−7a・7b調査区の位置

柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、磨製石剣等のいわゆる大陸系磨製石器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、石鍋等がある。土器層の下は粗砂層となり、洪水で全面が覆われたと推定される。粗砂層の下位は水平な粘土層の堆積である。これらは水田遺構の重なりである。いずれも良好な状態で遺存した。水田の状況については後節で概略を示す。

2．G－7a 調査区の基本土層と遺構概要

(1) 基本土層（Fig．7）

G－7a 調査区の基本的層位関係は Fig．7－1、2に示した。調査区が広く、層が部分的にとどまる所がある。Fig．7－1は調査区北壁の中央よりやゝ東寄りの断面実測図である。自然堤防状をなし、板付Ⅰ式土器段階の畦畔部分となる層位（中層としてまとめられる層位）を欠落している。花粉分析、プラント・オパール分析、植物種子分析等の分析資料を採取した部分である。水田耕作土の重なりの状態は最も普遍的である。

Fig．7－1は以下のような層位関係を示している。第1層は厚さ15cm前後を測る。現在の水田耕作土である。黒灰色をなす。第2層は酸化鉄、マンガンが沈着した水田床土、黄褐色粘土層、厚さ約10cmとやゝ厚い。第3層は厚さ35cm前後の暗茶褐色粘質土層である。この層は東側の台地際では多量の遺物が包含され、あたかも土器層の状況を示している。弥生時代中期から中世までの遺物が含まれるが、下位が古く、上部に新しい遺物が堆積している。台地上から流れ込んだ遺物群である。第4層は厚さ10cm前後の淡茶褐色混砂土層、径1mmの砂粒を多く含んでいる。第5層は厚さ5～10cmの粗砂層、洪水層と考えられる。板付Ⅰ式土器の小片が包含されている。第6層は厚さ10～20cmの暗黒灰色有機質土層、この層の下位には径1cm前後の板付Ⅰ式土器の小片がわずかにみられる。また、第5層との接点、つまり第6層の表面には無数の凹みが存在する。凹みには粗砂がつまっている。水で洗い出すと、その大部分は人間の足跡であることが判明した。第7層は第6層よりやゝ黒っぽい暗黒灰色有機質土層で厚さ20cm前後を測る。この層の表面も第6層同様に人の足跡が無数についていて凹凸が著しい。また、この層の下位にも板付Ⅰ式土器の小片が若干検出できる。この断面にはみられないが、調査区の大部分には第6層と第7層の間に第5層同様の洪水砂である粗砂層が介在している。第6・7層は表面の足跡や土質からみて板付Ⅰ式土器期の水田耕作土である。耕作土中には炭化米も存在する。第8層は厚さ10～15cm前後の暗灰色砂質土層であるがやゝ粘性が強い。この層の表面にも部分的に人の足跡が認められるが、洪水による撹乱が随所に存在している。刻目突帯文土器単純期の水田耕作土の可能性が強いが、面的には把握できなかった。第9層は厚さ20～25cm前後。暗灰黒色砂質土層である。上層に比較し粘性が小さく砂質である。部分的に水成による偽層が認められ、洪水による堆積とみられる。第10層は厚さ10cm前後の黒灰色粘質土層である。この層の表面も凹凸が著しく、人の足跡が残っているが、凹みは浅く、明瞭な足跡は検出できない。刻目突帯文土器単純期の水田耕作土である。第11層は基盤の八女粘土層となっている。

Fig．7－2の土層断面図は、調査区の北に片寄った部分の東西断面で、板付Ⅰ式土器段階の水路から自然堤防状の高まり（畦畔をかねた土手）にかけての土層関係を示している。第1層から第7層にかけては Fig．7－1の第1～7層と同一である。第8層以下は自然堤防状の高まりのみ堆積する土層である。第8層は暗褐色砂質土層で厚さ10cm前後を測る。第9層は青灰色細砂層で厚さ5～10cm。第10層は9層よりやゝ粗い灰色砂層、厚さ20cm前後を測る。第8～10層から出土する土器は型式的に夜臼Ⅱa式土器として分離できる。第11層は Fig．7－1の土層断面の第8層に相当する。第12層は

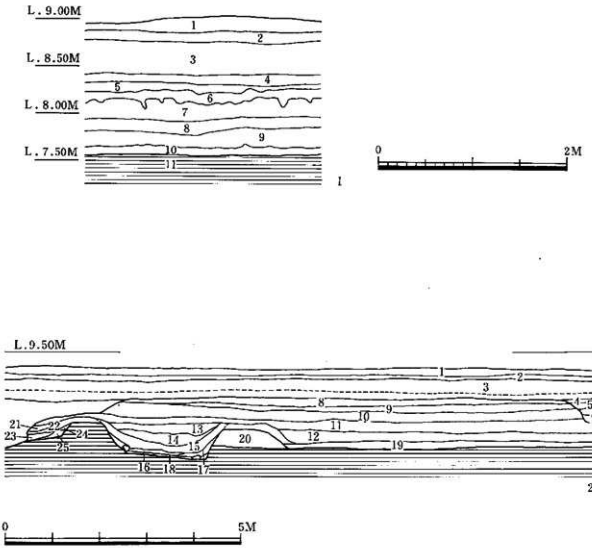


Fig.7　G－7a 調査区基本層序

Fig.7－1の土層断面の第9層に対応する。またFig.7－1の最下層である第10層はFig.7－2の第19層に対応し、刻目突帯文土器単純期の水田耕作土である。その他の層は、自然堤防状の高まり部分のみに堆積する。第13層から第18層は、刻目突帯文土器単純期の水田に伴う水路内の堆積層である。第13層はやゝ粗い砂を含んだ青灰色微砂層、厚さ10cm前後でレンズ状に堆積する。第14層は粗い粗砂を含んだ暗灰色砂層、厚さ10cm前後を測る。第15層は黒灰色粘質土層で厚さ10cm前後、水路を越えて両岸の両側にも堆積している。明瞭に区別することはできなかったが、この層中に水路の壁のたちあがりがあるとみられる。第16層は灰色砂質粘土層、厚さ5cm前後。第17層、八女粘土層のブロックの混入した黒色粘土層。第18層、灰色粗砂層が薄く堆積している。水路の埋土はいずれもレンズ状の堆積をしている。第20層は黒色粘質土層で下層水田の畦畔を形成している。厚さ約40cmを測る。第21層から第25層は水路の東側に堆積する土層であるが、板付Ⅰ式土器段階の小河川によって大部分は削られている。第21層は暗灰色砂層で厚さ10cm前後。第22層は黒灰色粘質砂層で厚さ10cmを測る。第23層・24層は黒色粘質土層。第25層は灰色砂質粘土層となっている。板付Ⅰ式土層段階の小河川は黒灰色粘土層と粗砂層の互層となっており、木材、木葉、種子などの多量の有機物を含んでいる。

以上の層位関係で、弥生時代開始期に関わる第５層から第25層にかけての層位を、検出遺構との関連より、上層を板付Ⅰ式土器段階の水田遺構に関連する層位、第５～７層とする。中層は残存状態は良好でないが刻目突帯文土器単純期上層に関連する層位、第８～11層とする。下層は刻目突帯文土器単純期の下層水田に伴う第12層以下として大別する。

(2) 遺構概要

G－7a 調査区で検出した遺構は、いずれも水田に関連した遺構である。大きく上・下二面の遺構であるが、中位に部分的に遺構面が存在するが、大部分は洪水によって消失している。上層から遺構の概要をみていこう。

上層遺構（Fig. 8）

幹線水路である小川、小川と水田を限る土手（大畦畔）土手上に掘削された取排水溝、上・下二面の水田耕作土、水田を限る畦畔が確認されている。幹線水路の小川は調査区の東端部において、その西岸（左岸）を検出した。西岸の長さ約27m、小川は幅４mを確認、小川の大部分は東側道路敷の下にはいっている。さらにその東に位置するF－7b 調査区の所見から、川幅は10mを越えることはな

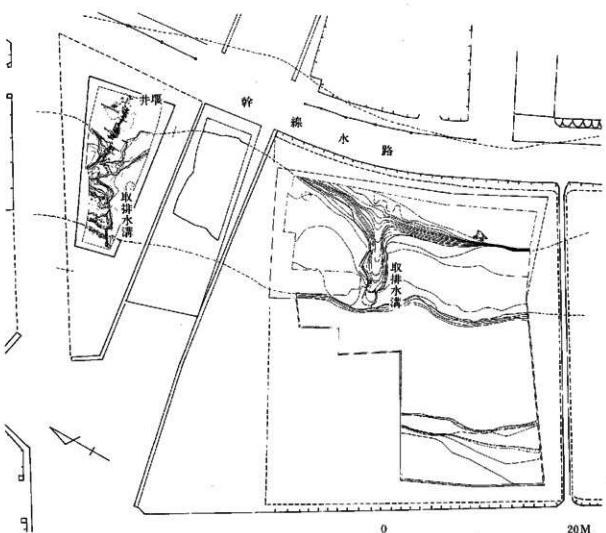


Fig.8 G－7a・7b 調査区遺構関連図Ⅰ（板付Ⅰ式土器期）

い。深さは調査区内で約1.2mを確認しているが、さらに深くなる。川と水田を限る土手は幅7～10mで、小川に沿っている。水田面との比高差は約30cmである。小川と水田と結ぶ取排水溝は調査区のやゝ北側に片寄った所に検出した。幅1～3m、長さ9m、深さ10～70cm、水田から川に向って傾斜している。溝の途中には溝に直交し二列の杭・矢板列が存在し、杭・矢板間に土砂等を入れた水量調整を行なっていたとみられる。水田耕作土は上・下二面存在し、いずれも廃絶は洪水による粗砂層の堆積で、水田面に残る足跡もこの粗砂によって埋っている。水田区画は東側が川の土手によって限られる。上の水田では調査区内にその他の水田区画は認められない。下の水田では調査区の西側に並ぶ矢板列が認められる。この矢板列が次の水田とを限る畦畔であるが、南北を限る畦畔は確認していない。いずれにしても、推測される地形から南北に細長い水田区画が考えられる。水田1区画の広さは、上の水田が18m以上×26m以上の468㎡以上、下の水田が11m×26m以上の286㎡以上の面積が求められる。水田耕作土中から多くの炭化米が出土し、プラント・オパール、水田雑草等の分析結果も、この層が水田耕作土であることを強く支持している。

中層遺構

中層遺構は刻目突帯文土器単純期に時期比定できる。洪水の攪乱によって大部分が破壊され、確認

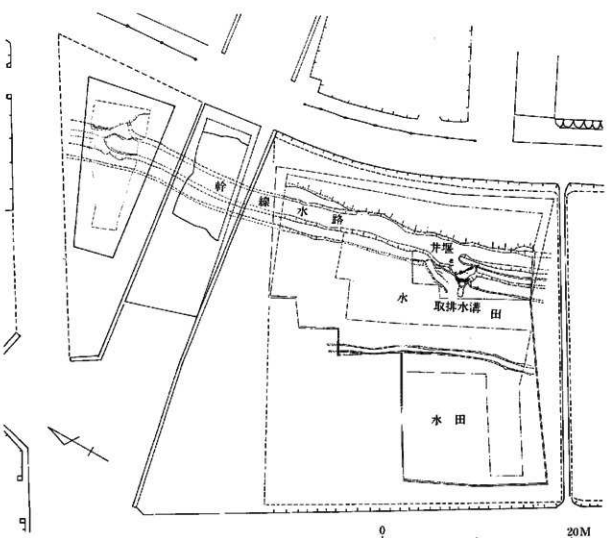


Fig.9　G－7a・7b調査区遺構関連図Ⅱ（突帯文土器期）

できた遺構は幹線水路と考えられる溝と水田面に残る足跡である。溝は幅1.5m、深さ30cm、断面U字形をなす。確認したのは土層観察用に残したベルト部分の長さ約1mにすぎないが、位置、方向、規模からみて下層水田の幹線水路に相当するものと考えられる。水田耕作土考えられる土層は、プラント・オパール、水田雑草の種子分析、花粉分析の結果は、水田耕作土であることを支持している。しかし、水田面が洪水で荒らされ、一部には偽層がある。部分的に足跡が残るが、全面に拡がることはない。

下層遺構（Fig. 9）

刻目突帯文土器単純期の水田遺構である。検出した水田遺構は、水田に給水するための幹線水路、この水路に設置された井堰、水路と水田を限る畦畔、水出と水出を区画する畦畔、水田から排水するための排水路、それに設置された井堰、水田と幹線水路を結ぶ取排水溝がある。幹線水路は人工的に掘削されたと考えられ、ほぼ直線的に南北にのびている。水路幅2.4～3.0m、断面形はU字形～逆台形で、最も残りの良い部分で深さ1.35mを測る。長さ27.5mを確認した。調査区のやゝ南に片寄った部分に井堰が存在するが残存状態は良くない。井堰のすぐ上流部は上の水田から排水路と水田からの取排水溝の合流点で、二重に井堰がつくられている。これは排水を給水に切り換えるすぐれた構造である。水路を限る畦畔はやゝ大きく、幅約1.5m、高さ30cm、水田を区画する畦畔は幅約80cm、高さ20cmとやゝ小さい。水田耕作土は黒褐色粘質土、厚さ10～15cm、表面は足跡で凹凸になっているが、浅くて足跡は掘り出せない。

3．G－7b 調査区の基本土層と遺構概要

(1) 基本土層（Fig.10）

Fig.10にG－7b調査区南壁の土層面実測図を示した。大別した基本土層はG－7a調査区と大差ない。

第1層、最近の宅地化に伴う盛土層。第2層、最近の水田耕作土、下面に酸化鉄、マンガンの沈着した水出床土がある。厚さ25～30cm。第3層、茶褐色粘質土層、台地際には土器や石器等の遺物が多量に包含される。西側にいくに従い遺物量はへり、土層も明茶褐色土層となる。厚さは西側が薄く15cm前後、東側は厚く35cm前後となる。G－7a調査区の第3層に対応する。第4層、黄褐色混砂土、厚さ3～10cm、土器がつまっている。第5層、暗茶褐色混砂粘土層、上面は凹凸が著しい。厚さ5～18cm、弥生中期の土器を包含している。第6層、粗砂層、西側にレンズ状に堆積している。第7層、灰褐色混砂土層、厚さ5～15cm、中央部に薄くレンズ状に堆積する。第8層、粗砂層、厚さ25cm前後、板付Ⅰ式土器段階の幹線水路（小河川）の西端部にあたる。水路の埋土は黒灰色有機質土層と粗砂層の互層となっている。有機質土層中には木葉をはじめドングリ等の植物種子が多量に含まれている。第9層、青灰色微砂層、厚さ15～25cm前後。自然堤防状の高まりのトップをなす層位である。第10層、暗青灰色微砂、厚さ5～20cm、中央部にレンズ状に堆積する。第11層、やゝ粘性のある暗青灰色微砂層、厚さ5～15cm、東側に堆積している。第12層、暗青灰色砂質土、厚さ5～20cm、調査区西半部に堆積している。第13層、青灰色砂質土、厚さ12cm前後、西側のみに堆積している。第14層、暗茶褐色粘質土、厚さ5～15cm、西半部から始まり、西に向って序々に厚くなる。第15層、暗灰色微砂、東半部、下層水出の水路の上部にレンズ状に堆積する。厚さ8～20cm。第16層、褐色砂混入土、厚さ9cm前後。第17層、茶褐色砂混入微砂、厚さ10～15cm。第16、17層は水路の上位にレンズ状に堆積する。第18層は暗黄褐色砂粒混入微砂、厚さ10～25cm、中央部に厚く堆積している。第19層、第18層とほぼ

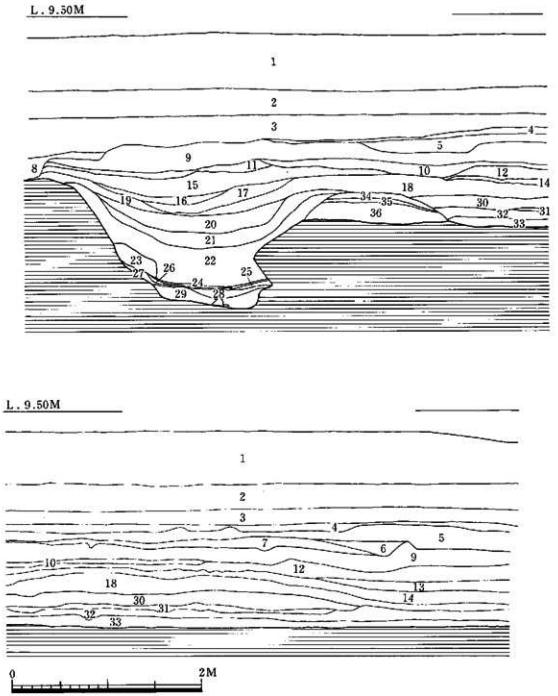


Fig.10　G−7b 調査区基本層序

同様である。第20層から第29層までは水路の埋土である。いずれもレンズ状に堆積している。第20層、黒褐色砂質土、厚さ15cm前後。第21層、暗黒灰色粘質土、厚さ15cm前後。第22層、黒色有機質土層、水路下半部に厚く堆積する。厚さ40cm前後。第23層、八女粘土層のブロック層、厚さ15cm前後。第24層、黄褐色細砂、厚さ3cm前後と薄い。黒色粘土の小ブロックを含む。第25層、黒灰色微砂、厚さ5cm前後、西壁近くに部分的に堆積。第26層、黒灰色微砂、厚さ3cm前後、東壁近くに部分的に堆積。第27層、黄褐色微砂が混入した粗砂、東壁近くに部分的に堆積、厚さ5cm前後。第28層、黄褐色～黒

灰色微砂が混入した粗砂、厚さ5～10cm。第29層、水路床面に堆積する層で八女粘土層のブロックを含む灰色粗砂、厚さ8～15cmを測る。第30層、一部に暗青灰色の微砂を含んだ暗褐色砂質土、中央部に15～20cmの厚さで堆積する。第31層、暗黒色砂、厚さ5～8cm。第30層の下位に薄く堆積する。第32層、暗黒褐色砂質土、厚さ8～15cm、畦畔より両側に堆積し、下層水田耕作土を覆っている。第33層、暗黒褐色粘質土、厚さ10～15cm。表面に若干の凹凸がみられる。下層水田耕作土である。第34～36層は、畦畔を形成する層である。第34層は暗褐色粘質土。第35層、暗褐色粘土。第36層は八女粘土と黒色粘土の混在層、厚さ20cm前後。畦畔の断面形は半円状をなす。ド場で幅155cm、上場で約70cm、高さ33cmを測る。G－7a 調査区と同様の規模をもつ。基盤層は黒色粘土層、八女粘土層となっている。

上層の水田は調査区内にはわずかしか検出できていないため、G－7a 調査区との層の対比は極めて困難である。土層断面の第8層と取排水溝の埋土（図なし）が上層水田遺構に対比される。中層に対比される層位は、層が複雑で、かつ県道505号線が介在しているため、極めて困難であるが、第9層から第12層があたるものと考えられる。第13層以下は下層あるいは下層遺構の埋土である。

(2) 遺構概要

G－7b 調査区で検出した遺構も、G－7a 調査区同様に水田に関連した遺構である。本調査区では、G－7a 調査区でみられた中層の遺構は確認できなかった。上層から遺構概要をみていこう。

上層遺構（Fig. 8）

幹線水路である小川、川を塞ぐ井堰、水田と小川を結ぶ取排水路および集落と水田部分をつなぐ橋の遺構を検出した。小川は調査区の東半部に存在する。G－7a 調査区から蛇行反転する部分にあたる。川の状況は G－7a 調査区と同様である。小川の深さは調査区が狭く危険であったので確認していない。小川には大規模な井堰が設置されている。調査区内で検出した井堰の長さは約6.5mであるが、推測長は12m前後と考えられる。径20cm前後の二又になった丸太材を打ち込み、又部に径20cm前後の丸太を横木として渡し、基礎としている。それに径5～6cm、長さ2m強の杭をたてかけるように打ち込んでいる。現状ではそれが2段に残り、現存高は2mを超える。また、この井堰を利用して本橋も作られている。井堰のすぐ上流には、水田と水路を結ぶ取排溝がつくられている。水田側（西）から水路（東）に向って傾斜しながらドっている。ただし、G－7a 調査区で検出した取排水溝のように直線でなく、大きく2ヶ所で蛇行している。取排水溝の途中には杭5本（3本は抜き穴）が打ち込まれ、水量調整を行っていたと考えられる。水路には完形の大型壷が転落しているが、これは祭祀に利用された可能性が強い。畦畔は幅40cmで、両側に杭が打ち込まれていたとみられる。なお、大型の壷は板付Ⅰ式土器の最終末に近い頃のものとみられる。

下層遺構（Fig. 9）

調査区はせまいが、刻目突帯文土器単純期の水田は明瞭な形で検出することができた。いずれも、G－7a 調査区の延長部分にあたる。検出した遺構は調査区の東側を北流する幹線水路と水路西側の畦畔および水田面と幹線水路の一段深く掘りくぼめた木器貯蔵坑である。幹線水路は板付Ⅰ式土器段階の小川と切り合い関係にあり、残存状態はやゝ不良である。幅2.3m、断面形は逆台形～U字形、深さ約1.0mを測る。畦畔は下場で幅1.3～1.5m、上場で0.8～1.2m、高さ約30cmである。盛土畦畔である。水田耕作土は暗褐色粘質土層、厚さ10～15cm、表面に若干の凹凸がある。

第3章　遺物出土状況

G−7a・7b調査区にはさまれた位置関係にあり、かつ先立って発掘調査が実施された県道505号線調査区の発掘所見、すなわち、現水田面下に弥生時代中期〜中世の遺物を多量に包含した粘土層があり、その下は弥生時代前期の遺物包含層となっている。この前期層の上部では板付Ⅰ式土器と夜臼式土器が共伴するが、板付Ⅰ式土器が多く、夜臼式土器少ない。下部では同様に板付Ⅰ式土器と夜臼式土器が共伴するが、板付Ⅰ式土器が少なく、夜臼式土器が集中して出土するというものであったが、湧水が激しく詳細については不明な点が多い。折しも、突帯文土器の単純期の存在が問題にされていたので、G−7a・7b調査区の調査は、県道部分の欠を補うことを目的として、前期層については遺

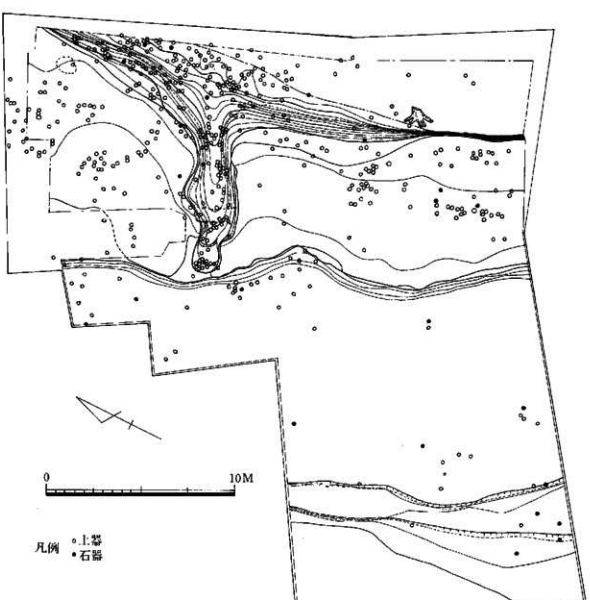


Fig.11　G−7a調査区・上層遺物出土状況

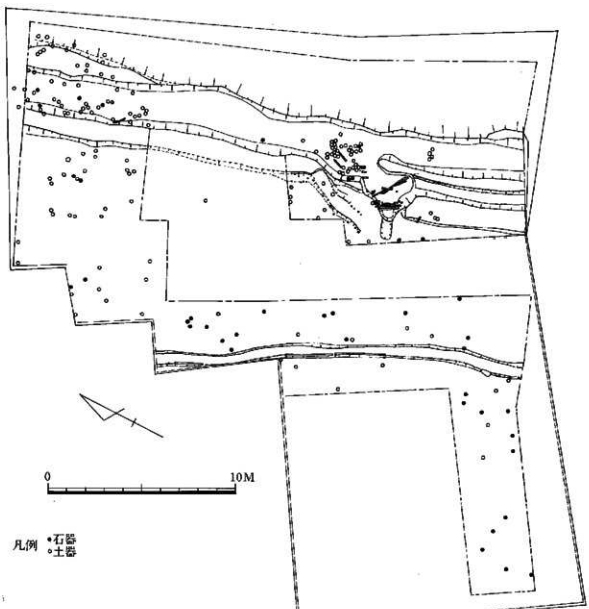


Fig.12　G−7a 調査区・下層遺物出土状況

物出土地点、レベルを記録し、分析資料の蓄積に務めた。弥生時代前期以前の遺物は、広い意味ですべてが遺構に伴うものである。水田経営に伴う、ある行為を示す出土状態を示していると考えられる。遺物が比較的集中して出土するのは、①　幹線水路内、②　幹線水路と水田とを結ぶ取排水路、③水田面および水田耕作土である。以下、各調査区で上・中・下層に分けて、遺物の出土状況の概略をみていこう。

1．G−7a 調査区・上層遺物出土状況 (Fig.11)

(1)　幹線水路の遺物出土状況

幹線水路の土層堆積は大きく見て粗砂層と有機質上層の互層になっている。有機質土層には植物遺

体が多量に含まれている。植物遺体は木葉・種子類からなり、注目されるのはヒョウタンが含まれていることである。この水路から出土する人工遺物は土器・石器に限られている。大型壷の破片が多い。水路に関連した祭祀に使用された土器とみられるが、G－7a調査区では、祭祀行為が行われたような出土状況は示さず、いずれの土器も破片となり、流れによって流され、遊離した状態を示している。後述するG－7b調査区でみられるように、祭祀行為の最終段階では定形品のまま幹線水路内に投棄したのが、本来の姿と見られる。よって、本幹線水路から出土する土器破片は、最も拡散した状態とみることができよう。この幹線水路から出土する土器は、刻目突帯文土器系の夜臼Ⅱb式（従来の夜臼式）土器と板付Ⅰ式土器に限られ、時期的には、ほぼ単純である。遺構編（『板付周辺遺跡調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集、1999年）で説明したように、幹線水路西側の自然堤防状の高まりに植った樹木がいずれも28年の年輪を示し、水路内に倒れ込んだりしていることから考えれば、少くともこの幹線水路の使用年数は約30年が考えられる。また、板付Ⅰ式土器の使用期間も層位関係からみると同程度の年数を考えることができる。幹線水路は土層堆積からみて、季節的あるいは場所によって滞水状態の部分が生じるものの、常時、流水があったことを示している。

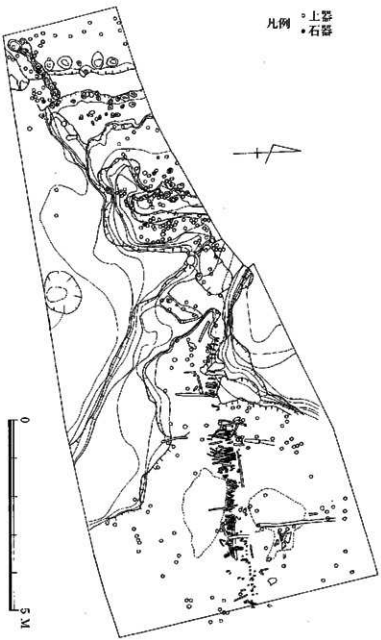


Fig.13 G－7b調査区・上層遺物出土状況

(2) 取排水溝の遺物出土状況

取排水溝からは土器破片が集中して出土している。上器の器形を見ると、中型壷が大部分を占め、甕形土器は口縁部破片1点があるにすぎない。出土土器の主なものは、Fig.15－1、Fig.16－1～4、Fig.21－7等に示したものである。土器は沈線文（有軸羽状文、複線弧状八字形文）、彩文（平行線文、有軸羽状文）、あるいは丹塗りで飾られたものばかりである。幹線水路出土土器とは異なっており、この種の土器が主に水口（水尻）の祭祀に使用されたことがわかる。同じ水に対する祭

祀でも幹線水路（井堰）と水口（水尻）に対する祭祀行為は時期が異なっていた可能性もある。

(3) 水田面および水田耕作土遺物出土状況

水田面に多数の足跡が残されているのは先述した。この足跡の大部分に指先を認めることができるので、当時の人々は素足で水田にはいり、農作業をしていたことが考えられる。当然のこととして、水田からは籾等の植物種子や植物遺存体等の自然遺物を除いて、人工遺物が混入して出土する要因は極めて少ない訳であるが、本水田からは若干の遺物が出土している。遺物の出土状況から、いくつかの混入の要因が推測可能である。

先ず、耕作土中から出土する遺物である。いずれも土器片である。径1㎝未満の小破片が多いが大部分は壺型土器の胴部である。水田の全面にわたって散発的に存在する。中型の壺形土器の破片から見て、水口（水尻）祭祀に使用された土器が、何らかの理由で、水田に落ち込み、それが、水田耕作に伴い、細片化し拡散したものと考えられる。次いで、水田耕作土を覆う粗砂層中からの出土遺物である。この粗砂層が洪水に起因していることを考えれば、この層の出土遺物は、幹線水路や土手上に散乱していた遺物が含まれると考えることができる。ただし、出土する土器はいずれも小破片である。洪水の規模を考える上で示唆的である。最後に、水口周辺の水田面から比較的集中して出土した小石がある。長径4㎝前後、短径3㎝前後の丸味をもった自然石で約40個が出土している。小石には全く加工等は認められないが、水田に小石がはいる不自然さから人為的に水田に投げ込まれたと考えた。想像をたくましくすれば、秋の収穫後、水口周辺にエサを求めて集ったカモ等の渡り鳥を取るために投げられた投弾とみれないこともない。広大な面積の市営住宅建

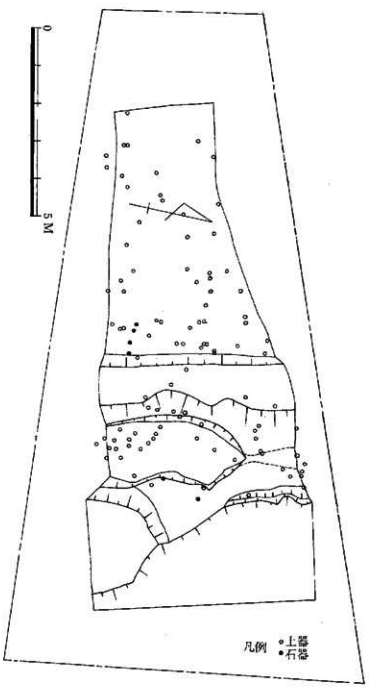


Fig.14 G－7b 調査区・下層遺物出土状況

設に伴う発掘調査のトレンチ内にカモが住みつき、子ガモが孵化したことを考えれば、現実味がわく。

2．G－7a 調査区・中層遺物出土状況

中層の遺物は、幹線水路西側の自然堤防状の高まりにのみ遺物包含層がみられるにすぎない。遺構に伴うものでないが、完形土器に復原できるような破片がまとまって出土している。遺物量が少なく絶対的でないが、上層出土土器に比較し、甕形土器が多い傾向にある。この現象は下層土器についていえることであり、板付Ⅰ式土器の人々と刻目突帯文土器の人々の間に水田祭祀に若干の相違があったのであろうか。下層遺物の出土状況で詳細にみていくことにする。

3．G－7a 調査区・下層遺物出土状況（Fig.12）

(1) 幹線水路の遺物出土状況

下層の幹線水路は上層の幹線水路に比較し、粘土質土層が堆積し、水の流れは上層ほどなかったとみられるが、上層ほど木の葉等の植物遺体は堆積していない。出土土器の大部分は水路底に接して出土するものが多い。ほぼ水路の全域にわたって遺物が出土しているが、集中するのは井堰周辺から、その上流に設置された水口部分である。井堰は水路を横切るように打ち込まれた杭列に簡単な横木を渡したものであり、中央部の杭は抜けて周辺に散乱している。遺物の出土状況から調査区外の北側にも井堰の存在が推測できる。土器類は、この井堰に流失を妨げられたように、杭列間に散在していた。出土した土器の器種は、甕形土器、大型壷、小型壷、鉢形土器があるが、大型壷は少なく、甕形土器の存在が目立つ。

(2) 取排水溝の遺物出土状況

取排水溝は排水を用水に切り変える堰と水口（水尻）に設けられた堰の二重になっているが遺物はこの堰間に最も多い。大型壷の底部破片、浅鉢形土器、甕形土器Ⅳ類がみられ、状況は幹線水路の井堰周辺と大差ない。

(3) 水田面および水田耕作土遺物出土状況

水田面および水田耕作土中の遺物出土状況は上層水田と大差ない。投弾と考えた自然石も水口周辺に散在しており、水田に関しては遺物の出土状況に差をみいだすことはできない。

4．G－7b 調査区・上層遺物出土状況（Fig.13）

G－7b 調査区では幹線水路内に大規模な井堰が設置されている。水に対する祭祀の一つが、この堰を中心におこなわれていることを知ることができる。井堰の上流部には、土器片が流れついた状態で出土するが、量は多くない。ただ、注目される遺物として今回は報告していないが「陰部隠し」の丹塗りの木製品の存在がある。祭祀の一行為を示しているとみられるものである。また、井堰の下流には、大型壷が完形品で出土している。偶然に落したものではなく、人為的に投げ込まれたものと見られる。また、井堰上流に設置された取排水溝の完形土器は、先に報告したとおりである。

5．G－7b 調査区・下層遺物出土状況（Fig.14）

幹線水路につくられた木器貯蔵坑の遺物の出土状況については、先に報告したとおりである。また、下層水田の遺物の出土状況は、G－7a 区の上層や下層水田の状況と同じである。ただし、石庖丁の出土状況については、遺物説明の前に詳細に述べる。

第4章　出土遺物

1．上層出土遺物（Fig.15～22）

出土土器には壺形土器、壺形土器、鉢形土器の器種がみられるが、最も量が多いのは、壺形土器である。上層土器は板付Ⅰ式土器と刻目突帯文土器の共伴状態を示している。出土土器は遺跡が水田遺構という特殊事情のため、器種構成等は生活遺跡とは異なっていると考えられる。水田祭祀あるいは水に対する祭祀関連で、当該調査区にもたらされたものが大部分を占めると考えられる。ただし、刻目突帯文土器単純期から板付Ⅰ式土器にかけての変遷が、層位的に把握できた数少ない遺跡である。以下、検出遺構に対比するように、上層、中層、下層出土土器を大別し、個々について詳細に検討を加えることにする。なお、器種の分類については、山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合－」『鏡山猛先生古稀記念論集　古文化論攷』1980年　によっている。

Fig.15－1～5は、いわゆる如意形口縁を有する壺形土器Ⅱ類として分類した、板付Ⅰ式土器である。1は復原口径19.4cm、口縁部外面側の幅2cmの間に粘土を貼り付て肥厚させ、下端に段を形成する。この技法は壺形土器の口縁部形成の手法と同じである。口縁部の補強を意図したものであろうか。口縁端部は短く、ゆるやかに外反する。口縁端部全面に棒状工具で、やゝ深い刻目が丁寧に施されている。刻目は垂直ではなく、上がやゝ左に傾斜している。器体外面の調整は、肥厚部分および段の下方2cmが縦位（上→下）の刷毛目調整で、特に、段の部分は刷毛目の起点になっており、段が明瞭になっている。肥厚部の下半は横ナデによって刷毛目痕が消される。胴下半部は斜位（右→左）の刷毛目調整、刷毛目の大きさは1cmの間隔に10本がみられ、やゝ粗い。外面にはススが付着する。内面は斜方向の刷毛目調整後、口縁部と胴下半が横ナデによって消されているが、胴下半は器面がやゝ荒れている。内面に焦げつきがある。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は黒褐色をなす。2は復原口径19.0cm。口縁部はゆるやかに短く外反する。口縁端部の刻みはヘラ状工具で丁寧に全面に刻むが、刻み目はやゝ小さい。器体外面は斜方向の板による擦痕を丁寧に施し、口縁部には横ナデを加えている。口縁部から胴上半部にかけてススの付着が著しい。内面は横方向のナデ調整を加えている。胎土に多量の砂粒（径0.1～0.3cm）を含む。焼成は良くない。色調は外面が暗褐色。内面が黄褐色をなす。3は復原口径22.2cm前後、口縁部は大きく外反し如意形をなす。口縁端部の刻目は、刷毛目調整具を使用して刻んだと考えられ、刻目の中に刷毛目状の条線が残っている。刻目は口縁端部全面に丁寧に施文している。器体外面の調整は横方向の刷毛目で、ススの付着が著しい。内面にも刷毛目調整を施すが、口縁部は横ナデによって消している。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良く、色調は黒褐色をなす。4は口縁部の小破片である。口縁部は大きく外反し如意形をなす。口縁端部は角ばり、全面に刻目を右まわりに施している。刻目の原体は刷毛目原体と同一の工具と考えられ、刻目および口唇部に刷毛目状の条線が残っている。器体外面は斜方向の刷毛目調整で、口縁部は横ナデ調整で刷毛目を消している。内面は横ナデ調整。外面から口縁部内面にかけてススが付着し、特に頸部は顕著である。胎土に多量の小さな砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色である。5は復原口径19.5cm前後。口縁部はわずかに外反する程度で、完全な如意形になっていない。口縁端部は丸くおさめ、端部は斜上方を向いている。口縁端部の刻目は棒状工具で軽く押えたように1cm前後の間隔で施し、鋭さ、明瞭さを欠き、他の土器と比較し趣を異にする。器体

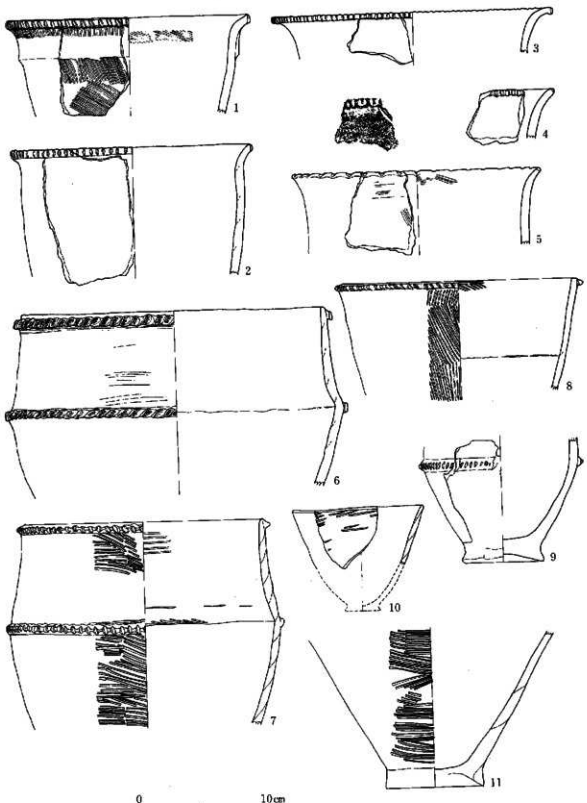


Fig.15　上層出上土器実測図 I

外面の調整は、一部に縦方向の刷毛目痕を認めるが、そのほとんどを横方向の板の擦痕によって消している。一部にススの付着が認められる。内面は板による横方向の擦痕で調整している。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良く、色調は外面が暗褐色、内面が暗黄褐色である。

Fig.15－6、7、9、11は甕形土器Ⅳ類として分類した刻目突帯文土器（夜臼式土器）である。7、11は県道部分の板付Ⅰ式土器・夜臼式土器共伴期の小川から出土した土器であるが、参考品として紹介する。いわゆる二条突帯をもつ土器の一群で、胴部中位に屈曲部がみられる。6は復原口径23.8cm前後、胴部屈曲部径27.0cm前後。「く」字形反転はあまり顕著でない。口縁部突帯は口唇部よりやゝ下方に貼り付けるA類に属し、下方の突帯は屈曲部に貼り付けている。突帯の刻目は器面調整具（板（刷毛目工具）あるいは貝殻）によるもので、右まわりに施文している。刻目中には工具の痕跡が条線として5、6本残っている。器体外面の調整は屈曲部より上が、板による横方向の擦痕、屈曲部より下がナデによるものであるが、突帯の剝落部に貝殻条痕が認められるので、下地調整として貝殻条痕を加えていたことがわかる。外面にはススの付着が顕著である。内面はナデによって調整している。胎土には多量の砂粒を混入し、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は黄褐色をなす。器壁は内様の粘土帯の積み上げで、粘土帯の幅は1.5～2.0cmを測る。7は復原口径19.0cm、復原胴部屈曲部径22.0cm前後、屈曲部はゆるやかで顕著でない。口縁部の突帯は口唇部に接して貼り付けられるB類に属し、下の突帯は屈曲部に貼り付けられ、断面形は共に三角形をなす。刻目は棒状工具で左まわりに施文される。器体外面の調整は胴屈曲部以下が斜方向（右→左）の貝殻条痕で、一部ナデによって貝殻条痕を消している。屈曲部より上は横方向（右→左）の貝殻条痕で、一部ナデによって貝殻条痕を消している。上の突帯以下にはススが付着し、胴下半部は二次的な加熱によって赤変している。内面は一部に横方向、斜方向の貝殻条痕を認めるが、保存状態が悪いので詳細については明らかにできない。粘土帯の幅は1.5cm前後で、内傾に接合している。胎土には砂粒を多最に混入し、焼成は良好である。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をしている。9は口縁部を欠いている。底部径6.4cm、現存高7.2cm、本来は10cm前後の器高に復原できる。他と比較して非常に小型品である。屈曲部に貼り付けられた突帯は断面三角形で、刻目はヘラで浅く入れられている。屈曲部はほとんどなく、ゆるやかにたちあがる器形をなす。底部はあげ底状をなす。器体外面は器面の荒れが激しく調整痕は明らかにできない。一部にススが付着している。底部周辺は二次的加熱のため赤変している。内面はナデ調整。内底部に焦げつきを認める。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は黒褐色をなす。11は甕形土器の胴下半から底部にかけて遺存している。器壁のたちあがりからみて、甕形土器Ⅳ類の下半部と考えられる。底部径7.7cm、外底部に木葉痕が残っている。器体外面の調整は横方向（右→左）の貝殻条痕をある一定幅で、上から底部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復している。胴部下半にススが付着し底部とその周辺は二次的加熱のため赤変している。内面はナデ仕上げで、粘土帯の接合の痕跡が凹凸になって残っている。粘土帯の幅は3cm前後で、内傾に接合されている。内底部に焦げつきがみられる。底部の形態は中層出土土器に近い同筒状をしている。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は黄褐色をなす。

Fig.16－8は甕形土器Ⅰ類に分類した刻目突帯文土器（夜臼式土器）である。復原口径19.0cm前後、口縁部に一条の刻目突帯をめぐらす。突帯は口縁部に接して貼り付けられるB類に属し、断面形は三角形をなす。刻目はヘラ状工具で左まわりに施文している。器体外面はやゝ粗い刷毛目調整を胴下半部から口縁部にかけて縦位にかきあげている。刷毛目調整痕は突帯にもついており、刷毛目を施したのは突帯貼り付け以後であることがわかる。内面は口縁部に斜方向（右→左上方）の刷毛目痕が部分的に残っているが、ナデによって消す努力を払っている。外面にはススが付着している。胎土

には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は外面が黒色、内面が褐色をしている。

Fig.15－10は壺形土器Ⅲ類として分類したものであるが、きわめて小型品である。復原口径10.4㎝前後、推定器高は８㎝前後である。高坏の脚部破片と考えたが、粘土帯の接合や外面の貝殻条痕から壺形土器と考えた。底部から外方に直線にたちあがり、口縁端は丸くおさめている。器体外面は横方向の貝殻条痕で、一部をナデによって消している。内面はヘラ磨きによって調整している。粘土帯の幅は1.4㎝前後で、内傾に接合している。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は褐色をしている。

Fig.16－１～４は壺形土器Ⅱ類に分類した中型の壺である。いずれも板付Ⅰ式土器である。１は頸部から胴上半部の破片で約半分を残している。胴部最大復原径は28.4㎝前後、頸部と胴部の境の復原径20.0㎝前後を測る。胴部はやゝ扁平な球形で、胴部の最大径は中位にあると考えられる。頸部と胴部の境にヘラ描きの沈線二条を配し、その下に三段からなる有軸状文を描く。沈線を描く順位はその切り合い関係から、上位の平行沈線→有軸羽状文の軸線→羽状文となる。器体外面の調整は横方向のヘラ研磨。内面は器面の保存状態が悪く詳細に観察できないが、上半部に粘土帯接合部を指で押えた痕跡が残っている。頸部と胴部の境の接合部の段は小壺のみに見られる特徴であり、中壺では不明瞭である。粘土帯の幅は2.0～2.5㎝前後であるが、接合の状態は不明。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は黄褐色をなす。２は頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境の復原径17.0㎝前後、胴部最大復原径24.5㎝前後を測る。胴部は球形をなし、胴部最大径は胴中位にあると推測される。頸部と胴部の境にヘラ描きの平行沈線四条を配し、その下位に四本を単位とする複線弧状八字形文を配する。沈線は緩いヘラ状工具で的確に描かれ、沈線の中には丹が埋め込まれ、彩文効果を出している。器体外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は板による横方向の擦痕で削り状の調整が加えられ、頸部と胴部の境の粘土帯接合によって生じる段は、ヘラで横方向（右→左）に削り取られている。頸部から腕がはいる中壺以上は、この接合によって生じる段はこのように削り取られる例が多い。胎土には岩干の砂粒を混入しているが精良。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が暗褐色をなす。３は胴部破片。胴部最大復原径20.7㎝前後で、最大径は胴部中位にあると考えられる。器体外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。一部に黒色顔料の塗布が認められる。元来は全面に黒色顔料が塗布されていたと考えられる。胴上半部には赤色顔料（丹）で五本の平行線文が描かれている。いわゆる彩文土器である。内面はナデによる丁寧な調整が加えられている。胎土は精製されたきわめて良質のもので、焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。４は底部から胴上半部にかけて遺存している。底部径8.4㎝。いわゆる円盤貼り付けの底部で、高さ0.8㎝を測る。器壁はゆるやかにカーブを描いてたちあがり、胴部は球形をなす。現状での胴部最大径は27.2㎝を測る。器体外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、外底部も同様の丁寧なヘラ研磨で調整する。外面は全面に黒褐色顔料を塗布している。内面は横方向の板による擦痕状の調整。底部の製作法が粘土の剥離から詳細に観察できる。底部は最初は底部端が外に張り出した台形状につくられる。この形状は後述する下層山土の壺形土器の底部（Fig.29－３）と全く同じである。最終仕上げにおいて、底部端と器壁の間に粘土を充填して円盤貼り付け状の底部に成形している。技術的には下層土器の発展的な姿として把握できる。器壁の粘土帯は幅４㎝前後で、接合部は凸状をしているが、底部付近の二ヶ所は内傾接合、上の二ヶ所は外傾接合となっている。内傾・外傾接合が同一土器にみられる珍しい例である。胎土は精製したきわめて良質なもので、焼成は良好である。色調は黒褐色をなす。この土器は胎土の質や黒色顔料の塗布からみて彩文土器であることは疑いない。

Fig.17に示した２点は壺形土器Ⅲ類に分類した大型壺である。破片数として大型壺が多い点は注

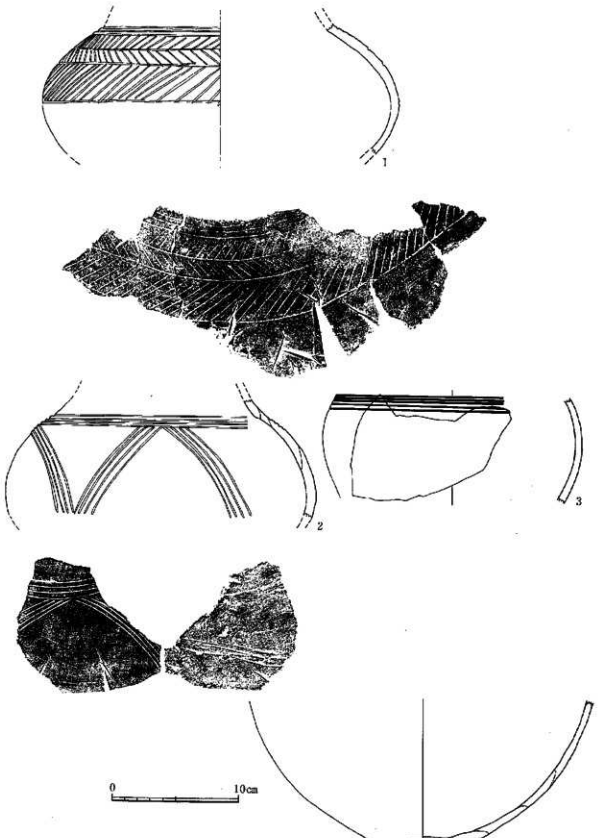


Fig.16　上層出土土器実測図Ⅱ

目される。1は復原口径36.8cm、頸部復原径30.1cm、頸部と胴部の境の復原径41.0cm、現存胴部最大復原径48.4cm、現存高26.0cmを測る大型品である。口縁部から胴上半部まで遺存している。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめている。口縁下約4cmの幅は帯状に粘土を貼り付け肥厚させているが、肥厚下端部の段はあまり明瞭でない。頸部はゆるやかに下方にひろがり、頸部と胴部の境に沈線を入れているが明瞭な段はない。胴部の最大径は胴中位に存在すると推測される。器体外面は横方向のヘラ研磨調整で、全面に丹が塗られているが、器面の残存状態が良くなくない。内面は斜方向（右→左上）の粗い刷毛目調整を施している。刷毛目は左まわりに移動・調整しているが部分的にナデによって消している。口縁部は端部より約7cmの間を横方向にヘラ研磨調整を加え、刷毛目調整痕を消し、丹塗りしている。この内面の帯状丹塗りは前段階の延長上で考えることができる。頸部には粘土帯接合部を指で押えた痕跡が明瞭に残っている。口縁部と胴部に黒斑が残っている。胎土には砂粒を混入しているが良質である。焼成は良好で、外面は赤褐色、内面は黒褐色をなしている。粘土帯の接合は外傾で、粘土帯の幅は7.5～10.0cmとやゝ幅広い。2は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境に削出しの突帯をめぐらした数少ない例である。肩部復原径40.3cm前後を測る。器体外面は横方向（左→右）の丁寧なヘラ研磨調整が全面におよんでいるが、突帯の下端に、わずかに刷毛痕を確認することができるので、下地として刷毛目調整を加えていたことがわかる。削り出し突帯はヘラ研磨によって生み出されたもので、シャープさに欠ける。断面形は角の丸い三角形をなす。内面は細い刷毛目で横方向（右→左）に調整する。刷毛目の起点がほぼ一定しており、左まわりに移動反復する。粘土帯の接合は外傾を示し、粘土帯の幅は3.0cm前後である。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は黒褐色をなす。

Fig.18に示したのも壷形土器Ⅲ類に分類した大型壷の破片である。1は口縁部から頸部にかけての破片、2は頸部の破片である。1は復原口径28.1cmを測る。口縁部は大きく は外反しない。口縁端部は丸くおさめる。口縁外面には約3.0cmの幅で粘土を貼り付け肥厚させている。肥厚部は明瞭で、肥厚部下端には明瞭な段が形成されている。頸部はあまりひろがらずに下方にのびる。器体外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であり、口縁部は横ナデ調整によって仕上げている。内面は横方向の刷目調整であるが、口頸部の指圧痕が明瞭に残り、凹凸が著しい。口縁部端から約6.0cm幅は横方向の丁寧なヘラ研磨調整を帯状に加え、刷毛目調整痕を消している。この研磨は口縁部内側を帯状に丹塗りする行為に通じるものである。頸部は数段にわたって粘土接合部を指で押えた痕跡が明瞭に残っている。粘土帯の接合は外傾接合で、粘土帯の幅は4.5cm前後である。胎土には多量の砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は黒褐色をなす。2は頸部復原径26.4cm前後、推定復原口径は33.0cm前後を測る大型品である。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させたものと考えられ、肥厚部下端の段の一部が残っている。頸部は下方にはあまりひろがらない。器体外面の調整は下地に斜方向（右さがり）の刷毛目調整を施し、その上に丹塗りを行い、次にヘラ研磨調整を加えている。ヘラ研磨はあまり丁寧ではなく、部分的に下地の刷毛目が確認できる。ヘラ研磨は口縁部近くが横方向、下方が斜方向（右さがり、左さがりを混在）のヘラ研磨である。内面は調整の順序は、ほぼ同じであるが、ヘラ研磨の前にナデ調整が加わる。口縁部近くはやゝ目の粗い横方向の刷毛目調整、頸部には目の細い刷毛目調整を斜方向（右→左上方）に施し、その後、口縁部を帯状に丹塗りし、横方向のヘラ研磨を加えている。丹塗りの顔料が部分的に垂れさがっているのが観察できる。粘土帯の接合は内傾接合であるが、不明瞭、接合部の指押えからすれば、粘土帯の幅は3cm前後とみられる。胎土にはやゝ大きい砂粒を混入している。胎土の色調は白灰色をなす。焼成は堅緻で、色調は外面が暗赤褐色、内面が暗褐色をなす。

Fig.19に示したのは壷形土器Ⅲ類に分類した大型壷の完成品である。G－7b調査区の幹線水路に

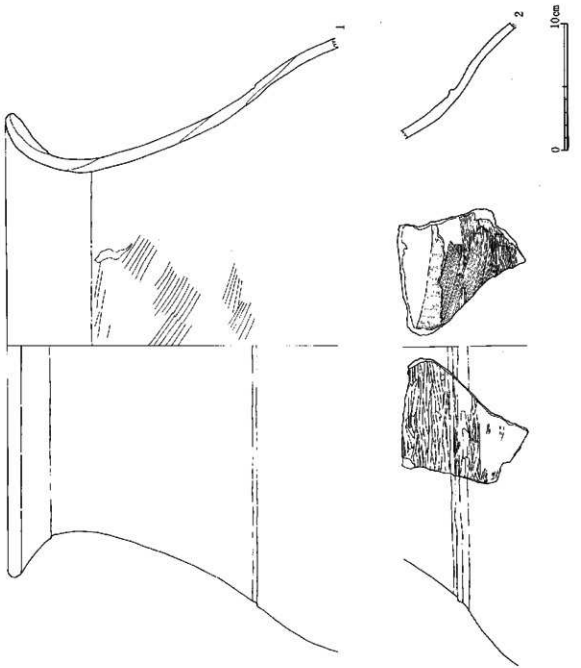


Fig.17　上層出土土器実測図Ⅲ

設置された井堰のすぐ下流に横たわった状態で出土した。出土状況からは井堰に関連した祭祀に利用されたものと推測される。完成品であり、G－7b 調査区の下流に位置するG－25トレンチの幹線水路の延長部分から出土した板付Ⅰ式土器の大型壷の完成品とならんで、板付Ⅰ式土器大壷の典型例である。出土時は口縁下の頸部に植物質の紐（ツル？）が、四条まかれていたが、保存状態が悪く、一部を残して剝落した。口径25.6cm、頸部径22.5cm、肩部径31.5cm、胴部最大径38.3cm、器高41.0cmを測る大型品である。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。口縁部は口縁端から約2.4cm

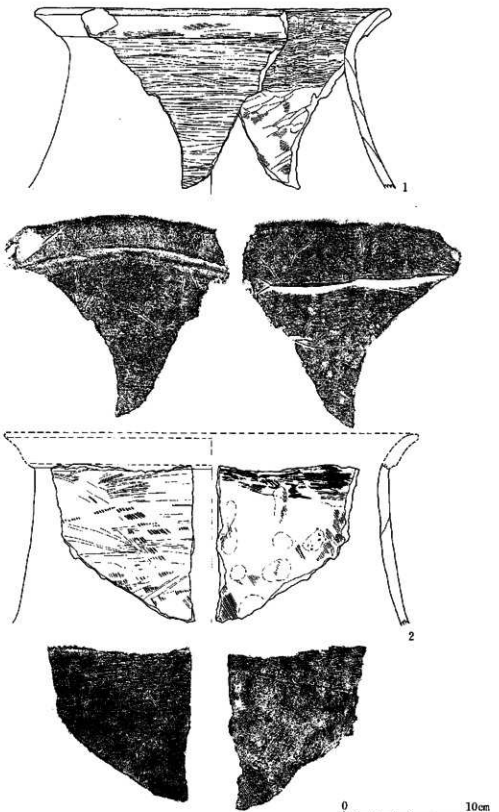


Fig.18　上層出土土器実測図Ⅳ

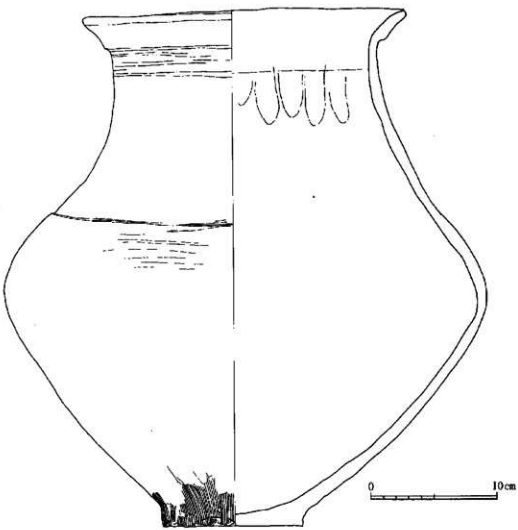


Fig.19　上層出土土器実測図V

の幅で帯状に粘土を貼り付け肥厚させている。肥厚部の下端部は高さ0.5cmの明瞭な段が形成されている。紐のまかれた範囲は約1.5cm幅である。頸部はゆるやかに下方にひろがり、肩部にやゝ不明瞭な段を形成している。体部はタマネギを逆にしたような形をしており、胴部最大径はやゝ上位の2/3のところにある。底部はいわゆる円盤貼り付け状をしているが、高くはない。器面調整を復原的に記述すると次のようになる。先ず、下地として、下から上にかきあげた縦位の刷毛目調整が左まわりに施され、仕上げにヘラ研磨調整が加えられている。ヘラ研磨調整は胴部上半部が右から左の横方向、下半部は左から右下の斜方向に丁寧に施されている。底部付近には、刷毛目調整とヘラ研磨調整の前後を示すように、ヘラ研磨調整で消し残された刷毛目調整痕がみられる。内面はナデによって調整されているが、一部に刷毛目調整痕が残っており、外面調整同様に、下地として刷毛目調整を加えたことがわかる。口縁部は横方向のヘラ研磨調整。粘土帯の接合は外傾接合で、頸部内側の粘土帯接合部には指押えの痕跡が明瞭に残っている。外面の全面と口縁部の内側が帯状に丹塗りされている。胎土には小さな砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。

Fig.20に示したのは、いずれも壷形土器Ⅲ類に分類した大型壷で、いずれも、板付Ⅰ式土器であ

る。1～4はいずれも口縁部破片である。1は口縁部の幅4.5cmに粘土を貼り付け肥厚させる。口唇部はヘラ研磨を加えているが、粘土の接合部が、いびつな凹線状として残っている。また、肥厚部下端の段はヘラ研磨によって不明瞭となっている。内外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、研磨はやゝ粗雑である。内外面は丹塗りで、赤色顔料の色が良く発色している。胎土には多量の砂粒が混入され、あまり良質ではない。胎土の色調は白灰色で、丹塗り下の器面の色調も同様である。焼成は堅緻。口縁部の一部に黒斑がある。2も同様に口縁部の幅4cmに粘土帯を貼り付け肥厚させているが、口唇部は丸くおさめている。肥厚部の下端の段は非常に明瞭である。器面調整は保存状態が良好でないため良く観察できないが、粗いヘラ研磨調整とみられる。胎土に多量の砂粒を混入するのは前者と同様である。焼成は不良。色調は黄褐色～赤褐色をなす。3は口縁復原径15.8cm、口縁部はあまり外反しない。口縁部に粘土を貼り付け、肥厚させるのは前二者と同様である。肥厚部の幅は約3.5cmである。口唇部はヘラ研磨され、やゝ角ばるが、中央に粘土の貼り付け痕が細い沈線状に残っている。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。内面は下地に斜方向（右さがり）の刷毛目調整を施し、口縁部にやゝ粗いヘラ研磨（横方向）調整を加えているが、頸部以下は刷毛目のままである。胎土には前者同様、多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が褐色をなす。4は復原口径17.0cm、口縁部の幅3.5cmに粘土帯を貼り付け肥厚させている。口唇部は横方向のヘラ研磨を加え、平坦にしているが、粘土接合部の痕跡が未研磨のまま、線状に残っている。肥厚下端部の段は、ヘラ研磨によってより明瞭になっている。外面は細い刷毛目を斜位（右さがり）に施し、その上に横方向のヘラ研磨調整を加えているが、ヘラ研磨がやゝ雑で、部分的に刷毛目調整痕が残っている。内面も下地調整として刷毛調整が加えられたとみられ、頸部の一部に刷毛目痕が残っている。ヘラ研磨も外面同様であるが、一部、棒状工具によると考えられる研磨がある。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が褐色をなす。5～7は頸部から胴部にかけての破片である。5は頸部と胴部の境の段はあまり明瞭でない。外面は丁寧な横方向のやゝ斜位のヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。頸部と胴部の境、および頸部に指押えが残り凹凸がある。粘土帯の接合は外傾接合である。6も5と同様の破片である。頸部と胴部の境の段は凹線状になり、明瞭である。内面は、頸部上端に斜位の刷毛目調整が一部にみられ、胴部は縦方向の板状工具の擦過痕で調整している。頸部には指押えの痕跡が縦位に残っている。粘土帯の接合は外傾である。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色である。8も頸部から胴部にかけての大きな破片である。頸部と胴部の境の段の部分の復原径40.0cm、胴部復原径は44.2cm前後を測る。頸部はゆるやかに下方にのびるが、あまり広がらない。頸部と胴部の境は凹線状になっているが、その部分にヘラ研磨が加えられ、やゝ不明瞭になっている。胴部はあまり張らず、胴下半部に移動している。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整を加えている。ただし、わずかであるが点々と斜方向（左→右下）の刷毛目調整が認められるので、下地に刷毛目調整が加えられていたと思われる。内面は頸部下半部に指押えの痕跡が明瞭で、その上から斜方向の刷毛目調整を加えているが凹部にはおよんでいない。上半部は斜方向（右→左上）の刷毛目調整である。胴部は右→左上にかきあげた刷毛目調整を幅4cm前後に右まわりに施し、その底部から上半部に向って反復させている。胎土には多量の砂粒を混入し、焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面は灰褐色をなす。胴部外面は黒斑がある。

Fig.21は壺形土器である。1～5は壺形土器Ⅱ類とした中型壺、6～9は壺形土器Ⅲ類とした大型壺である。1は胴上半部（肩部）の小破片である。肩部に段を形成するが、やゝ不明瞭である。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。幅1mmの細沈線で文様を施文する。文様は肩部に二本の平行線文、その下に二本を単位とする複線弧状八字形文を配している。内面の調整は横方向のヘラナデ状をなす。

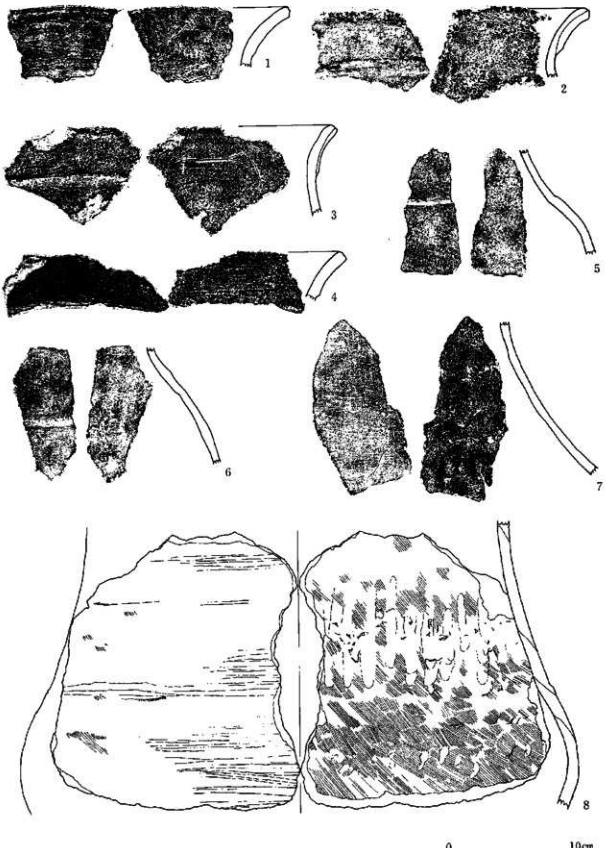


Fig.20 上層出土土器実測図VI

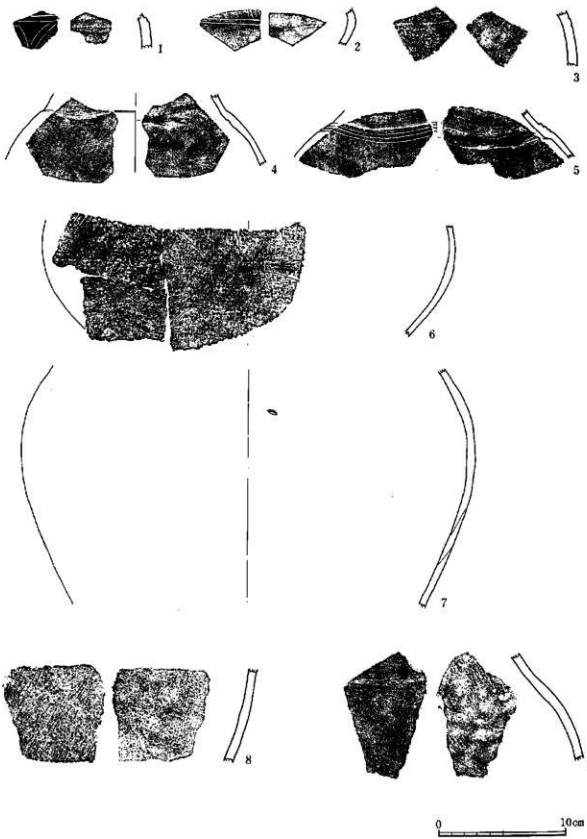


Fig.21　上層出土土器実測図Ⅶ

胎土は若干の細い砂粒を混入しているが良質である。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は黒色、胎土の色調は灰褐色をなす。2は胴中央部の破片である。わずかに屈曲部が認められる。胴最大部に二本の平行沈線（幅1㎜）を配し、その上に四本の縦線が認められるが文様の全体は不明。縦線が左にやゝ傾いているので、前者同様、複線弧状八字形文の可能性もある。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラナデ状の調整。胎土は精製され良質。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色～赤褐色、内面は黒色。胎土は灰褐色をなす。3は胴上半部の破片である。全体に磨滅が著しい。上半部に細沈線の三本の平行線文を施している。内外面の調整は明瞭にしがたいが、沈線部分をみると、外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であったことがうかがえる。内面は指押えがある。胎土には細い砂粒を混入しているが良質、焼成は良好。色調は灰褐色をなすが、これは胎土の色調である。4は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境の復原径は14.8㎝。頸部と胴部の境の段は3条の沈線状のヘラナデでやゝ明瞭である。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面は外面に比較し、やゝ粗雑であるが、横方向のヘラ研磨調整である。頸部と胴部の境の粘土接合面が段として明瞭に残るが、一部はヘラ研磨によって消されている。胎土に細い砂粒を混入しているが精製され良質である。焼成は堅緻。色調は外面が灰褐色～黒褐色をなすが、保存状態の良い所を観察すると、元来は黒色に塗布されていたとみられ、彩文土器であった可能性が強い。内面は白黄色をなす。5は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境の復原径は16.8㎝前後である。頸部は下方大きく広がっている。頸部と胴部の境は明瞭であり、その下に細沈線で四条の平行線が施文されている。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。外面全面に黒色顔料が塗布されている。その上に部分的に赤色顔料が残っている部分があり、彩文土器であることがわかる。赤色顔料の遺存部あるいは赤色顔料が落ちてもその下の黒色顔料に反映した遺存部から彩文を復原すると以下のような文様が読みとれる。先ず、頸部の文様は破片の右に片寄って六本の平行した縦線文がみられ、沈線と沈線の間に三本の平行線文が認められる。その下位はやゝ不鮮明ながら二～三段にわたって有軸羽状文が描かれている。内面はやゝ粗いヘラ研磨であるが、やゝ保存状態が悪い。頸部と胴部の粘土接合部は明瞭な段として残っているが、棒状の研磨によって削りとろうとしている。胎土は精製された良質なもので、焼成は堅緻。色調は外面が黒色、内面が黄褐色をなす。6は胴下半部の破片である。胴部最大復原径32.6㎝を測る。大型壷としては比較的器壁が薄く、器壁厚は0.5㎝前後である。破片の左右両端に肩部に施文された文様の一端が認められる。文様は複線山形文とみられる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は縦方向のヘラナデ調整である。胎土には多量の砂粒を混入する。焼成は良好で、色調は内外面共に黒褐色をなす。外面の上部に黒斑が認められる。1～6はいずれも板付Ⅰ式土器である。7は胴上半部から下半にかけての大きな破片である。胴部最大復原径35.8㎝前後である。全体的にみて長胴になると考えられる。本資料も大型壷のわりには器壁が薄く、器壁の厚さは0.6㎝前後である。外面は胴上半部が横方向のヘラ研磨調整、胴下半部が縦方向のヘラ研磨調整である。ヘラ研磨は比較的丁寧である。全面に丹塗りされているが、丹が落ち、残っているのは部分的である。内面には指圧痕が残り、わずかに叩凸がある。全体に磨滅している。内面の胴上半部には籾圧痕が明瞭に残っている。胎土には若干の砂粒が混入されている。焼成は良好で、色調は外面が黄赤色をなすが、残存している丹は良く発色しているので元来は丹色をなす。内面は灰黄色をなす。8は胴下半部の破片である。外面は斜方向（左→右上）のヘラ研磨調整であるが、研磨痕はやゝ粗い。内面は板による縦位の調整で、細い条線が認められる。板の幅は2㎝前後である。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が丹塗りされ、丹色をなすがやゝ淡い丹色で、一部に黒斑がみられる。内面は黄灰色をなす。9は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境の段は凹線状をなすが、やゝ不明

瞭である。頸部はやゝ下方で広がるが、胴部はあまり張りがない。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は指圧痕が凹凸に残り、その上に部分的に横方向の刷毛目調整が加えられている。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面は丹塗りで丹色であるが、大部分に黒色の付着物がみられる。内面は黄灰色をなす。

Fig.22－1は口縁部から頸部にかけての小破片である。口縁端はないがかなり外反すると考えられる。口縁部は粘土を貼りつけ肥厚させるが下端の段は不明瞭である。外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、磨滅し不明瞭、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質、焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。壷形土器Ⅰ類に分類できる。2、3は口縁部破片である。2は大きく外反する。口縁外面に粘土を貼り付け肥厚させる。下端に段を形成するとみられるが、欠損している。口唇部は粘土貼り付け部分が凹線状に残っている。内外面共横方向のヘラ研磨調整。また、内外面共に丹塗りであるが、丹の剝落が著しい。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は丹塗りの下は共に灰褐色をしている。壷形土器Ⅲ類に分類できる。3は大きく外反し、口縁端部は丸くおさめている。口縁外面には粘土を貼り付け肥厚させている。肥厚部の下端に段をつくるが、貼り付けのまま放置されていている。粘土貼り付け部は、それ以前に縦方向の刷毛目調整が施されている。外面は肥厚部は横方向（左→右）の刷毛目調整を施し、その上にヘラ研磨が加えられているが、刷毛目調整が明瞭に残っている。頸部以下は横方向のヘラ研磨調整。内面は横方向の刷毛目調整を施し、その上にヘラ研磨調整を加えているが、刷毛目痕が残っている。口縁部の外面から内面の一部に黒斑がみられる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共に黒褐色をなす。壷形土器Ⅱ類に分類できる。4は頸部破片、外方にひろがる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、一部に黒斑がみられる。内面は指押えの痕跡がみられ、粗いヘラナデの調整が加えられている。また、粘土帯の痕跡も明瞭で、粘土帯の幅は2㎝前後。内傾に接合されている。胎土は細い砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻、色調は内外面共に黒褐色をなす。側面は割れ口には後から研磨が加えられ、二次的に何らかに利用しようとしたことがうかがえる。壷形土器Ⅲ類に分類できる。5は頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境には凹線があり明瞭である。外面は横から斜位のヘラ研磨調整であるが、頸部はやゝ雑である。内面は下が横方向、上が縦方向の板によるナデ調整。胎土には砂粒が混入されている。焼成は堅緻、色調は内外面共に黄褐色をなす。壷形土器Ⅲ類に分類できる。6は浅鉢形土器である。復原口径23.0㎝、屈曲部復原径23.4㎝を測る。体部上半部で屈曲し、口縁部はゆるやかに反転し、口縁端部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整のいわゆる黒色研磨土器であるが、器面が荒れている。胎土は精製され良質。焼成は良好。色調は内外面共に黒褐色をなす。7は甕形土器の胴部破片、甕形土器Ⅳ類に分類できる。胴部の屈曲はゆるやかで、屈曲部にはヘラによる細い刻目が施されている。外面はヘラナデ状の調整、外面にはススの付着が著しい。内面はナデ調整である。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面は黒色、内面は褐色をなす。8は大型壷の胴部破片。外面は横方向のヘラナデ状の研磨、研磨部分に細い条線が観察できる。表面にススが付着している。一部に丹塗りの痕跡が認められる。本来は全面丹塗りされたものであろう。内面はナデ調整。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～褐色、内面は黒色をなす。9も大型壷の破片である。肩部の破片とみられるが確証はない。外面には横方向の貝殻条痕調整を加え、その上にナデ調整を施し、条痕を消そうとしているが条痕は明瞭に残っている。一部に丹塗りの痕跡が認められるので、本来は全面が丹塗りされていたとみられる。内面はやゝ粗い斜方向の貝殻条痕調整を加え、さらにナデ調整を加えているが、条痕が明瞭に残っている。粘土帯の接合部も明瞭に残っている。接合は内傾である。胎土には多量の砂粒が混入さ

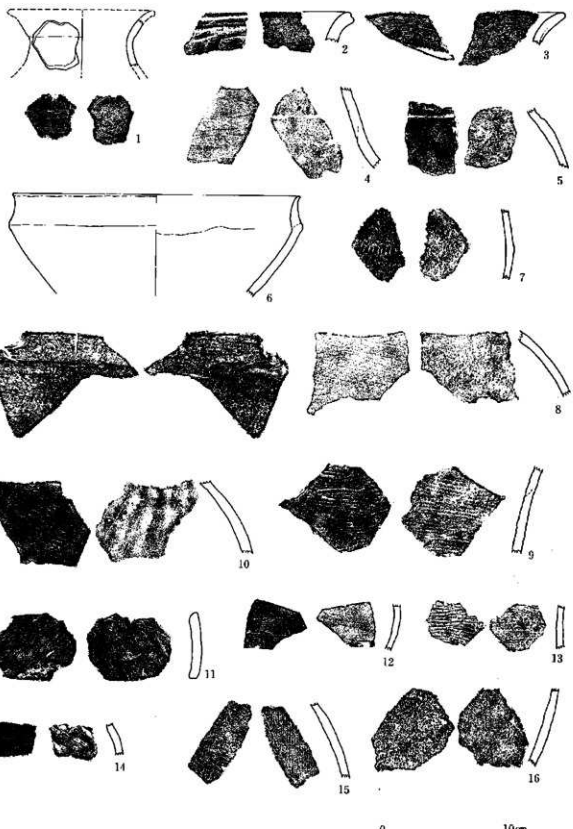


Fig.22 上層出土土器実測図Ⅷ

れている。焼成は堅緻。色調は外面が赤味がかった白黄色、内面は白灰色をなす。10も大型壷の肩部破片である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。ヘラ研磨には細い条線が観察できる。内面には指押えの痕跡が明瞭に残っている。胎土には多量の砂粒が混入されている。胎土の色調は白黄色。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は白灰色～黒灰色をなす。11は壷あるいは浅鉢の破片を利用してつくられた土製円盤である。周辺部を打欠いて楕円形に整形している。打欠き部分は磨滅している部分もある。内外面は丁寧なヘラ研磨調整された、黒色研磨土器である。胎土には砂粒が混入されているが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共に黒色をなす。12は小～中型壷の胴部破片である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。黒色顔料が塗られている。内面は横方向の丁寧なヘラ調整で、細い条線が観察できる。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻、色調は外面の黒色顔料の下が黄褐色、内面は黒褐色をなす。13は甕形土器の胴部破片である。外面は横方向の貝殻条痕調整、ススが付着している。内面は横方向の貝殻条痕調整を施し、上から横ナデ調整を加えている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は赤褐色～黄褐色をなす。14は壷形土器の胴部小破片、外面は横方向の丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面斜方向の粗いヘラ研磨調整であるが凹凸が著しい。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が黒色をなす。15も壷形土器の胴部破片。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は縦位の刷毛目調整。外面には黒斑がある。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が黒色、内面は白黄色をなす。16は甕形土器の胴部破片。外面はナデ調整。ススの付着が著しい。内面のナデ調整であるが、やゝ凹凸がある。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、外面の色調は黒色、内面は黒褐色～黄褐色をなす。

2．中層出土遺物（Fig.23、24）

中層出土土器は、洪水によって土層が荒らされているためか、きわめて少ない。ただし、自然堤防状の土手を形成する層から、比較的まとまって出土した一群があり、器種構成やその特徴を把握することができた。壷、甕、浅鉢がある。以下、個々について詳述する。

Fig.23－1は壷形土器Ⅲ類に分類できる大型壷である。口径20.5cm、肩部径33.2cm、胴部最大径39.4cm、器高は下半部を失うため明らかでないが45～50cm前後の大型品になる。割れ目が一定していて直線的なのは整指等の人為的な割り方と非常に良く似ており、この土器も祭祀の一行為として、人為的に打ち欠かれた可能性が強い。器形は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸くおさめている。頸部はゆるやかに下方に広がり、頸部と胴部の境に段ができるが、下層土器に比較しやゝ不明瞭である。肩が張り、胴部の最大径は上位にある。下半部を欠っているためはっきりしないが、土器の器形変化の流れからすると、かなり長胴になると考えられる。器体外面は横方向のヘラ研磨調整を施している。胴部の内面は斜位の左あがりの刷毛目調整。頸部は下地に刷毛目調整を施した後、横方向のヘラ研磨を加えている。口縁部内側の粘土帯接合部は指で押えた痕跡が明瞭に残っている。外面の全面と口縁部内側を帯状に丹塗りしている。丹塗りは焼成前おこなわれている。肩部外面に粘圧痕が明瞭に残っている。（図版PL.4－(4)）胎土には小さな砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、丹塗りの下の色調は淡灰褐色をなす。2は甕形土器の底部であるが、頸別は困難である。底部の中央に二次的に穿孔し、コシキに転用している。底部径6.4cm、孔径1.4cm、器体外面は底部近くに調整具であるヘラ状工具で横方向の沈線状の段が無数につき、一部に刷毛目痕が残る。ススの付着は外底部から認められる。内面は多方向の刷毛目調整を施し、その上にやはり多方向からのナデ調整を加えている。胎土に

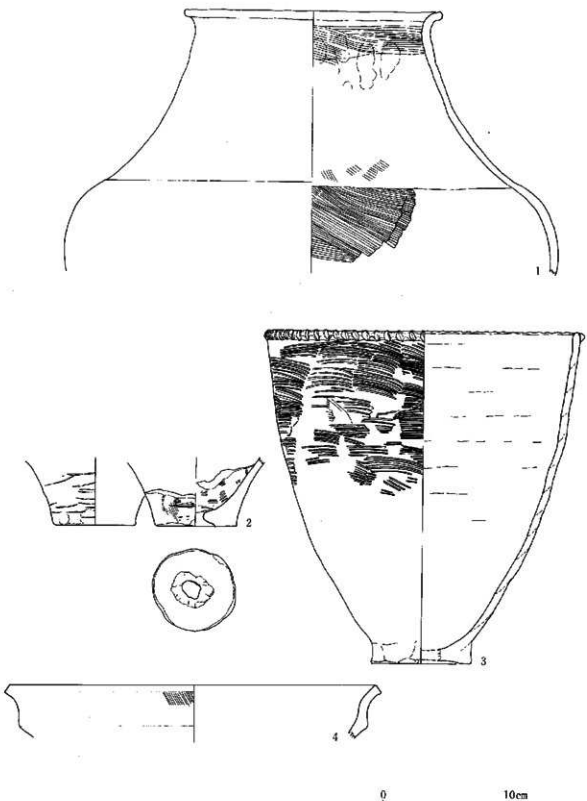


Fig.23　中層出土土器実測図 I

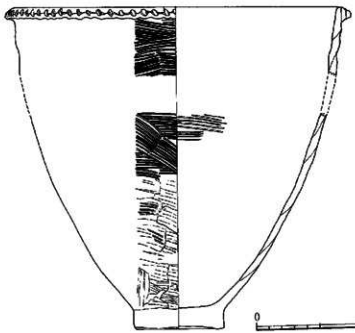


Fig.24　中層出土土器実測図Ⅱ

は砂粒を含む。焼成は良好であり、焼成は黄褐色をなしている。3は甕形土器Ⅰ類に分類した一群である。口径24.8cm、器高28.3cm、底部径8.0cmを測る。底部は低い円筒状をなし、外底部は周縁部から中心に向って削り調整を加え、やゝあげ底状をなす。体部は外傾しながらゆるやかにたちあがり、口縁部近くで直口状になる。器体外面はやゝ細かな貝殻条痕（下層七器の貝殻条痕と比較して）を横方向（右→左）に施している。貝殻条痕の単位幅は1.2cm前後であり、条痕の始点と終点はほぼ一致し、5cm前後の幅で縦に帯状をなし、それを右まわりに移動反転している。胴下半部はナデによって条痕を丁寧に消している。口縁部の突帯は口縁端から貼り付られるB類に属し、刻目は一部が突帯下の器面までおよんでいて、その刻みの延長の沈線から、ヘラ状工具を使用して、右まわりに施文していることがわかる。胴上半部の一部にススが付着している。胴下半部は二次的加熱のため赤変している。器壁の粘土帯の接合状況は明瞭で、幅2.0cm前後の粘土帯を内傾に接合する。胎土には砂粒を多量に混入する。焼成は堅緻で、色調は淡黄褐色をしている。4は浅鉢形上器の口縁部である。復原口径29.5cm、屈曲部復原径27.8cmを測る。器体上半部で内側にくの字に屈曲し、口縁部で再び、ゆるやかに外反する。口縁端部は丸くおさめず、角ばっている。器体の内外面は共に横方向のヘラ研磨調整であるが、口縁部外面の一部に刷毛目調整痕が観察できる。下地の調整として刷毛目調整を施し、その上にヘラ研磨調整を加えたことが判る。口縁部内側を帯状に、外面全面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は丹塗り部分以外は黄褐色をなす。Fig.24は甕形土器Ⅰ類に分類される。小破片となっていたが、ほぼ完形を知るまでに復原できた。口径26.0cm、器高25.5cm、底部径7.2cm　底部が低い円筒状をなすのはFig.23－3と同様である。外底部は周縁部から中心に向って貝殻条痕で調整し、やゝあげ底状をなす。周縁部には部分的であるが木葉痕が観察できる。器体外面の調整は貝殻条痕で、横方向あるいは左あがりに、Fig.23－3と同様の方法で、移動反復しながら施している。胴下半部は板の擦痕で貝殻条痕を消している。口縁部の突帯は口

縁端に貼り付けられるB類に属し、刻目は棒状工具で右まわりに施文する。胴上半部にススが付着し、胴下半部は二次加熱の痕跡をとどめている。内面は横方向（左→右）の貝殻条痕が一部に確認できるが、ナデによって消されている。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色～黒褐色をなし、内面は灰色をなしている。

3．下層出土遺物（Fig.25～32）

出土遺物に土器、石器、木器があり、量的にも多い。水田遺構は洪水による廃棄であるが、遺物出土量からすれば、3面の遺構面の中では最も永く存続したと考えることができる。以下、各遺物について詳述するが、石器の一部と木器は次報告にゆずる。

(1) 土器（Fig.25－31）

土器の器種には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、浅鉢形土器がある。

Fig.25は甕形土器で、1は甕形土器Ⅳ類に、2～7は甕形土器Ⅰ類に分類できる。

1は口径21.0cm、胴屈曲部径23.6cm、推定器高27cm前後で、ほぼ完形に復原できる。胴屈曲部はかなり上位にあり、屈曲部より上は直線的に内傾し、長さ約4.5cm、屈曲はくの字形になる。口縁端部はヘラ削り（右まわり）によって平坦に仕上げている。突帯は口縁部と屈曲部に貼り付けられ、口縁部の突帯は口縁下に貼り付けられるA類に属する。刻目はヘラ状工具で右まわりに施す。刻目は断面三角形の突出部に軽く刻まれる。突帯の貼り付けは、突帯の剥離面に貝殻条痕が観察されるところから、器面調整後に貼り付けられたものである。器体外面の調整は、胴上半部の屈曲部よりやゝ下方から口縁部にかけては、横方向（右→左）の貝殻条痕を口縁部から胴部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復して施している。胴下半部は縦方向（底部→胴部）に擦過する貝殻条痕とみられる擦過痕が観察できるが、器表の剥落が著しく確定しがたい。上半部の横方向の貝殻条痕は、各所において縦条痕に切られている。このことは、先ず下地調整として横方向の貝殻条痕を施し、その上から縦方向の条痕を施したことを示している。口縁部から胴上半部にかけてはススの付着が著しい。胴中央部は二次的加熱のため一部赤変している。内面の調整は横方向（右→左）の貝殻条痕で、口縁部から底部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復している。口縁部は板による擦過痕によって貝殻条痕を消している。内底部近くには焦げつきが認められる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は灰褐色をなす。

2は口径25.4cm、底部径8.4cm、器高22.8cmを測る。口径と器高がほぼ同じである。ほぼ完形に復原できた。底部は低い台形状をなし、底部端が横に張り出す。体部は外傾ぎみに直線的にたちあがる。口縁部の刻目突帯は口縁端に接して貼り付けられるB類に属する。刻目は棒状工具によるやゝ粗野なもので、右まわりに施文している。器体外面の調整は下から左上方にむかってヘラナデし、それを右まわりに移動反復している。内面の調整は横方向（右→左）の貝殻条痕で、口縁部から底部にむかって帯状に調整し、それを左まわりに移動反復している。突帯の下から胴上半部にかけてススの付着が著しい。胴下半は二次的加熱で変色している。胎土には多量の砂粒が混入している。焼成は良好である。色調は黄褐色をなす。3は復原口径17.4cm前後、やゝ胴がふくらみ、甕形土器Ⅰ類として分類した他の土器とは器形的にやゝ異なる。突帯は口縁部端に接して貼り付けられるが、断面形はカマボコ形をしていて、C類に属する。刻目は鋭いヘラ状工具で刻んだ細いもので右まわりに施文する。器体外面は棒状工具による凹線が縦方向に数条認められるが、その下地は丁寧なヘラナデを底部から

口縁部に向って施し、それを右まわりに移動反復して全体にヘラナデが施される。突帯下には板による擦過痕が横・斜方向に数ヶ所に残っている。内面は横方向（右→左）の板による擦痕で左まわりに移動している。外面の一部にススの付着がみられ、内面には焦げつきがみられる。胎土は良質で少量の砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は黄褐色をなす。4は復原口径18.0cm、推定器高は16cm前後のやゝ小型品である。体部はゆるやかに外傾しながらたちあがり、口縁部近くで直口する。ふくらみのある器形をなすと考えられる。口縁部の突帯は口縁端より、やゝ下った所に貼り付けられ、A類に属する。棒状工具の丁寧な刻目を左まわりに施文する。器体の調整は内外面共に貝殻条痕である。外面は横方向（右→左）に、底部から口縁部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復する。内面も横方向（右→左）に口縁部から底部に向って帯状に施し、それを左まわりに移動反復させている。口縁内側はヘラナデ調整によって条痕を一部消している。突帯より下の外面にはススが付着する。胎土に砂粒を混入し、焼成は良好。色調は褐色をしている。5は復原口径17.4cm、口縁部の粘土帯を内側に折りかえし肥厚させ、補強をはかっている。突帯は口縁端から外傾させて貼り付けたB類に属する。断面形は三角形をなす。刻目は他の土器と比較し、やゝ粗雑で右まわりに施文する。器体外面の調整は板による擦痕で、下から左上方へ擦過させ右まわりに移動反復する。内面は判然としないが、横方向（右→左）の擦痕がある。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻。色調は灰褐色をなす。本例のように、口縁部を内側に折りまげた例は、板付遺跡では極めてまれで、佐賀県宇木汲田貝塚にその例が多い。6は復原口径17.4cm、胴上半は直口している。突帯は口縁端より、やゝ下った所に貼り付けられ、A類に属する。棒状工具で粗い刻目を右まわりに施文する。器体外面は横方向（右→左）の板による擦痕で帯状に調整し、それを左まわりに移動反復している。内面は右から左さがりに擦過する貝殻条痕で、左まわりに移動反復するのが一部に観察できる。粘土帯の幅は1cm前後で、内傾に接合しているのが明瞭である。外面の突帯より下の器面にススの付着が著しい。胎土には多量の小さな砂粒を混入している。焼成は良好。色調は黄褐色をなす。7は復原口径20.6cm、口縁部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁部に貼り付けられた突帯は口縁端よりやゝ下った所にありA類に属する。刻目はヘラ状工具で細かく左まわりに施文する。器外面の調整は縦方向（底部→口縁部）の削り状のヘラナデを右まわりに移動しながら施している。内面は横方向（右→左）のヘラナデで左まわりに移動する。突帯より下にはススの付着が著しい。口縁部の内側に粘圧痕が明瞭に残っている。胎土には小さな砂粒を含むが良質。焼成は堅緻で、外面が黒褐色、内面が白黄色をなす。

Fig.26－1～7は甕形土器I類に分類した一群の土器である。1は口縁部が外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。突帯は口縁端部から傾斜をもって貼り付けられ、断面は角のとれた三角形をなす。B類に属する。刻目は棒状工具で太目につけられている。外面は指ナデ調整。内面は横方向の貝殻条痕の調整を加えている。外面の突帯以下にススが付着している。復原口径30.0cm。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は黄褐色をなす。2は復原口径28.6cm前後、口縁は直線的にたちあがる。突帯は口縁端より下った所に貼り付けられ、A類に属する。刻目は棒状工具で右まわりに施文している。器体外面の調整は横方向（右→左）の貝殻条痕を底部から口縁部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復している。内面はヨコナデ調整である。外面の突帯より下にはススが付着している。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は淡褐色をなす。3は口縁部にひずみがみられ端部は平坦でなく、丸くおさめる。刻目突帯は口縁端より下った所に貼り付けられ、A類に分類される。突帯の断面は半円状をなす。丸い粘土紐を貼り付けているのが明瞭である。刻目は細い棒状工具で深く刻まれる。外面は横方向の貝殻条痕調整、ススの付着が著しい。内面は斜方向の貝殻条痕調整で、上にナデが加えられている。胎土には多量の砂粒を混入し

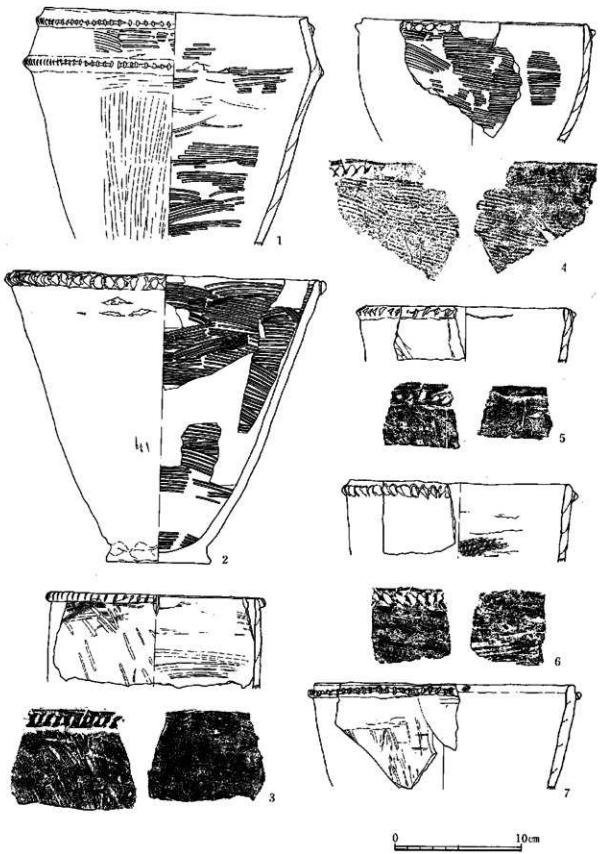


Fig.25　下層出土土器実測図 I

ている。焼成は良好。色調は外面が褐色～黒色、内面は赤褐色～黒色をなす。4、突帯の貼り付けはA類に属するが、口縁端のすぐ下に貼り付られ、細いが高さがある。外面は粗いヘラ削り状の調整とみられるが、ススの付着が著しく、不明瞭である。ススは突帯以下に付着し、突帯上面から口縁部には付着していない。内面は横方向の板ナデ調整。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面はススのため黒色、内面は赤褐色をなす。5は突帯の貼り付けはA類に属する。刻目は指頭でつけられたもので太く、内に爪の跡が残っている。外面は横方向の貝殻条痕調整で、上に板ナデ調整が加えられている。わずかにススが付着している。内面は横、斜位の貝殻条痕調整。胎土には少量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は白黄色をしている。6は突帯の貼り付けはA類に属する。突帯は細いが高く、ヘラ状工具によって刻目が施される。刻目には細い条線が認められる。口唇部はヘラナデによって平坦にしている。外面は粗いヘラ削り状の調整で突帯以下にススの付着が著しい。内面は板による横ナデの調整である。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。7は口唇部に突帯が貼り付けられていて、B類に属する。突帯の断面は三角形をなし、刻目はヘラによる深い刻みである。外面は板による削り状の調整、内面は横ナデ調整である。口唇部は平坦に形成される。外面にはススの付着が著しい。内面には焦げつきがみられる。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は内外面共黒褐色をなす。

8は甕形土器Ⅱ類に分類した甕形土器である。復原口径13.0cmの小型品である。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は平坦で角ばっている。口唇端の刻目は棒状工具を用いて施文する。器体外面の調整は、口縁端から胴下半部にかけてススの付着が著しいので観察が充分に行えないが、板による擦痕（ナデ）によっていると考えられる。内面には指の押圧痕が縦にはいる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は褐色をなす。

9は甕形土器Ⅳ類に分類する甕形土器である。現存するのは口縁部の一条の突帯のみであるが、口縁の傾きからみて、胴上半部で屈曲する二条突帯の上器である。復原口径29.2cm前後である。口縁部の突帯は端部から下ったところに貼り付けられ、A類に属する。口唇部はヘラで平坦に仕上げられ角ばる。外面はヘラ削り状の調整、内面は斜～横位の貝殻条痕調整である。外面にはススが付着する。胎土には砂粒が混入されている。焼成は良好、色調は内外面共黒褐色をなす。

10は鉢形土器である。胴下半部を欠損するが、ほぼ完形に復原することができた。黒色磨研された精製土器であり、器形、製作技法共に後期後半以降の黒色磨研土器の系譜に連なる土器である。口径21.2cm、推定器高15.5cm前後を測る。器形は底部端が外に張り出した低い台形状の安定した底部から、体部はやゝ外反しながらたちあがり、体部の上半で内側に強く屈曲し、口縁部は再び反転し、外反する。口縁端部は丸くおさめる。上半部の屈曲部は稜線をもつほど鋭くなく、むしろまるみをもっている。また、この屈曲部は弱いためか、内側に粘土を貼りたし補強している。内外面共、横方向のヘラ研磨調整を加えている。外底部は、周縁部から中心に向って不定方向のヘラ削り状の調整を加え、やゝあげ底状をなす。胎土には多量の砂粒を混入し、あまり良質ではない。色調は内外面共に黒色をなす。

11は浅鉢形上器である。黒色磨研された精製品である。底部がないので高杯形土器との区別が困難であり、本例もにわかに決めがたい。復原口径22.5cm、推定器高12.0cm前後を測るが、底部を失っている。体部は大きく外傾しながら、やゝまるみをもってたちあがり、体部上半部で鋭い稜線をもって内傾し、口縁部は短かく、強く外反する。口縁部内側には部分的に浅い沈線を認める。器形や製作技法は先の鉢形土器同様に黒色磨研土器の系譜に連なるものである。器体外面は横方向（左→右）、ないしは斜方向（左→右上）の丁寧なヘラ研磨調整を施す。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻

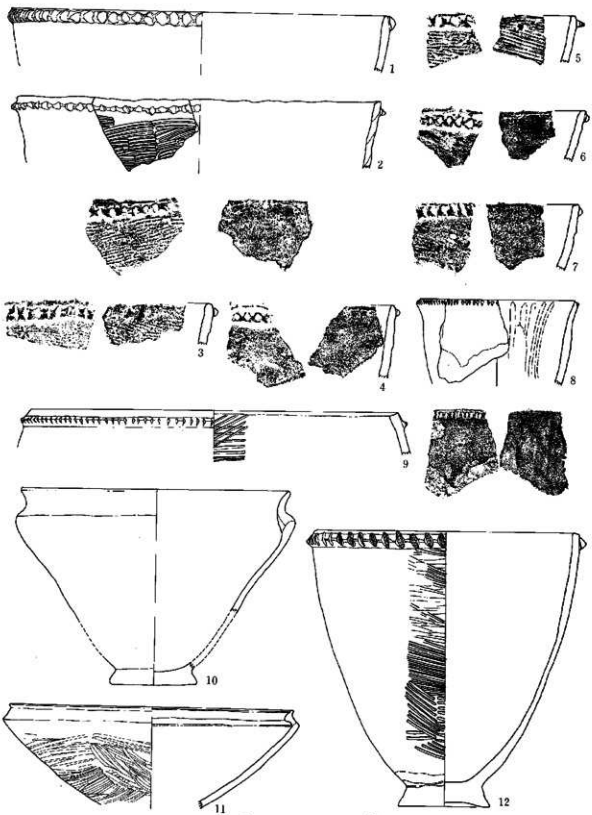


Fig.26 下層出土土器実測図Ⅱ

で、色調は黒褐色をなす。

12は甕形土器Ⅰ類とした甕形土器である。G－7a 調査区とG－7b 調査区の間の県道部分の調査で出土した資料である。層位的にも下層出土土器であり、参考資料として提示した。口径21.0cm、底径7.4cm、器高21.8cmを測る。口径と器高がほぼ同じである。底部は端部が外に張り出す低い台形状をした安定したもので、外底部は周辺部から中心に向って貝殻条痕とナデを施し、あげ底状にしている。体部は底部から外傾しながら内湾気味にたちあがる。口唇部はヘラ削りによって平坦に仕上げる。この平坦な仕上げは下層土器の特徴と思われる。突帯は口縁をやゝ下ったところに貼り付けられＡ類に属する。刻目は縦の条線が明瞭な棒状工具で右まわりに施文している。器体外面の調整は横方向（右→左）の貝殻条痕で、底部から口縁部に向って帯状に施し、それを右まわりに移動反復して施すが、さらにその上にヘラナデを加え条痕を消す努力を払っている。突帯より下から胴上半部にかけてススが著しく付着し、胴中央部は二次的加熱によって赤変している。内面の調整は横方向（右→左）のナデを左まわりに施している。内底部には焦げつきが認められる。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は良好で、色調は黒褐色をなす。

Fig.27に示したのは壷形土器である。１は壷形土器Ⅰ類、２、３、８は壷形土器Ⅱ類、４～６は壷形土器Ⅲ類に分類できる。１はG－7b 調査区木器貯蔵坑から出土している。ほぼ完形に復原できるが、口縁部は現地で盗難にあったため欠損する。１は推定口縁部径9.0cm、胴部最大径は上位にあり、径24.3cm、底部は丸底状の平底で径7.0cm前後、頸部と胴部の境の径13.4cm、推定器高は22cm前後を測る。口縁部は出土時の所見から、未発達で、わずかに短く外反し、口唇部は丸くおさめている。頸部はゆるやかに方にひろがる。頸部と胴部の境には明瞭な段が形成されている。胴部は球形に近いが、肩が張り胴部の最大径は上位にある。器体外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、器面の保存状態が悪く、荒れが激しい。内面は板による擦痕で、胴上半部は粘土帯の接合部を指で押えた痕跡が明瞭に残る。内底部には調整具の端部の移動によって生じた線が放射状に残っている。粘土帯の接合は外傾を示しているが、粘土帯の幅は明らかでない。胎土には小さな砂粒を混入しているが精良である。焼成は堅緻、色調は外面が黒色、内面が黒灰色をなす。２は頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境の復原径16.0cm、胴部の最大径は胴中位にある。頸部と胴部の境は段がつくが、あまり明瞭でない。内側は明瞭な段がつくが、板付Ⅰ式土器の内側にできる段とは異なっている。器体外面の調整は横方向の丁寧なヘラ研磨である。その上に一部丹塗りの痕跡がある。焼成後に丹塗りされたものと考えられ、本来は全面に塗布されたものであろう。内面は横方向（右→左）の貝殻条痕調整を下地として、その上にさらにナデを加えて調整するが、貝殻条痕を完全に消すまでにはいたっていない。粘土帯の接合は内傾で、粘土帯の幅は３cm前後である。胎土には精製された良質の粘土を用いている。焼成は堅緻、色調は黒褐色をなしている。３は口縁部の破片である。復原口径9.9cm、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめている。器面の内外は共に丁寧な横方向のヘラ研磨調整を加えている。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は黒色をなす。４は口縁部破片である。復原口径は16.2cm。口縁はわずかに外反し、端部を丸くおさめている。頸部はゆるやかに外方にひろがる。器体外面は横方向のヘラ研磨調整である。焼成前に、全面に丹を塗っている。内面は横方向（右→左）の貝殻条痕で調整し、口縁部内側は上から約３cmの幅で帯状に丹塗りが施され、その上に横方向のヘラ研磨を加えている。粘土帯およびその接合の痕跡が明瞭に残っている。粘土帯は幅1.4cm前後、内傾に接合している。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻で、色調は外面が丹色、内面が黄褐色をなす。５は頸部と胴部の境から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境の復原径は27.4cm、胴部最大径は39.8cmを測る。頸部と胴部の境には浅い沈線をめぐらし、段の存在を示している。胴部

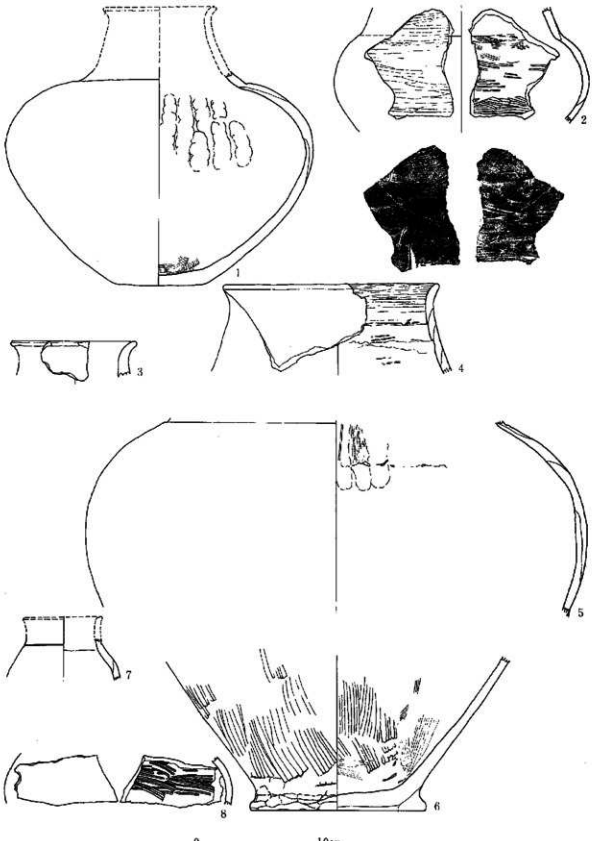


Fig.27 下層出土土器実測図Ⅲ

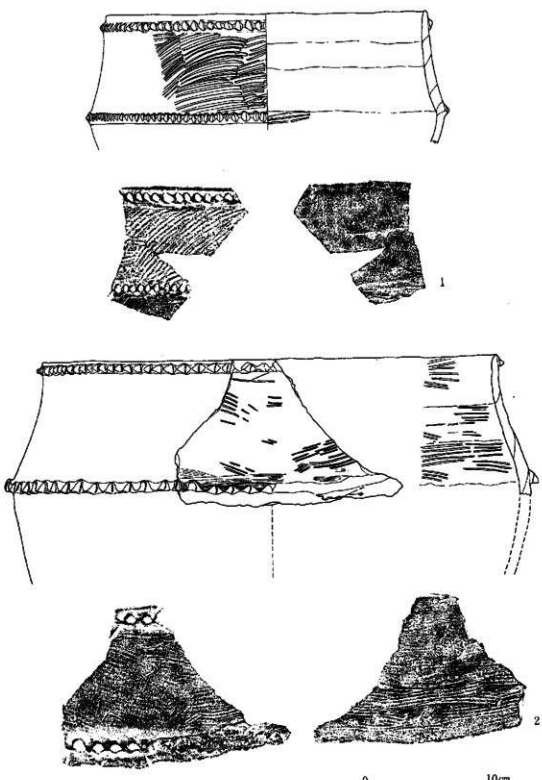


Fig.28 下層出土土器実測図IV

最大径は上位にあると考えられ、肩の張った長胴をなすと考えられる。器体外面は横方向のヘラ研磨で、焼成前に丹塗りしている。内面は肩部に粘土帯の接合部を指で押えた痕跡が明瞭に残っている。この上に板による擦痕を下から上にかきあげて調整する。粘土帯の幅は5～6㎝で、外傾に接合されている。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好であり、色調は外面が赤～黒色、内面が黄褐色～灰褐色をなす。6は胴部下半から底部を残している。底部は端部が指によってつまみ出され、低い台形状をなしている。底部径14.0㎝で安定した平底である。器体外面は焼成前に丹塗りし、下地はヘラで縦にかきあげ、その上をヘラ研磨で調整する。内面も外面の下地と同様の調整を下から上に施す。内底部には、丹塗り段階で落ちた丹が円形に付着している。粘土帯の接合は外傾を示す。底部の製作方法は甕形土器のそれと大差ない。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は丹塗り部は丹色に発色しているが、それ以外は白黄色なす。7は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境に浅い沈線を施し、段は比較的明瞭である。その部分の復原径は6.0㎝、胴部の復原径は9.0㎝を測る。頸部はほぼ直立に近い。口縁部は小さく外反すると考えられる。胴部は張りが少なく胴部最大径は中位ないしは下位にあると推測される。器体外面は横方向のヘラ研磨調整で、焼成前に丹塗りを施している。内面も丁寧な横方向のヘラ研磨調整で調整する。胎土には多量の砂粒を混入しており良質ではない。焼成は堅緻で、色調は外面が赤褐色、内面は黒褐色をなす。8は胴部破片である。胴部の復原径18.0㎝、球形をなすものと考えられる。器体外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整で、その上から黒色顔料を塗布し、黒く光沢がある。内面は、横方向（右→左）の貝殻条痕で調整し、一部を板の擦痕によって消している。胎土は精良。焼成は非常に堅緻であり、他の土器と異なる。色調は黒色をなす。他の土器とは一見して異なり注意すべき土器である。

Fig.28－1、2は甕形土器Ⅳ類に分類した甕形上器である。1は復原口径25.6㎝、胴屈曲部径28.8㎝、口縁部の突帯は口縁端より下った所に貼り付ける A 類に属する。突帯の刻目は棒状工具で右まわりに施文している。屈曲部の突帯は断面三角形で、刻目は、口縁部の突帯と同様である。口縁部は尖り気味に薄くなるが、口唇部は平坦で角ばっている。器体外面の調整は胴屈曲部より上半が斜方向（右→左下方）の貝殻条痕で、口縁部から胴部に向って帯状に施し、それを左まわりに移動反復している。屈曲部以下は横による横方向の擦痕とみられるが、ススが口縁下全面に付着しているので観察困難である。内面は指によるナデとみられるが断定できない。粘土帯の接合は内傾で、粘上帯の幅は3～4㎝である。粘土帯の接合部が沈線状に残っている。胴屈曲部以下に貝殻条痕がみられる。内面の器壁に焦げつきがみられる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は黒褐色をなす。2は復原口径35.8㎝、胴部屈曲部復原径42.0㎝を測る大型品である。口縁部の突帯は口縁端より下った所に貼り付けられる A 類に属する。突帯の貼り付けは器面調整後で、突帯貼り付け部の剝落部には横方向の貝殻条痕調整が明瞭に残っている。屈曲部の突帯は粘土帯接合部に貼り付けている。突帯の刻目は指状のもの（つめ状の痕跡があるが、施文具については特定できない。）で、右まわりに施文する。器体外面の調整は、胴屈曲部より上半部が、右から左上方に擦過された貝殻条痕であるが、板による擦痕によって一部を消しているため、詳細は明らかにしがたい。胴屈曲部以下にはススの付着が顕著で、明瞭でない。内面は横方向（右→左）の貝殻条痕調整で、口縁部から底部に向って帯状に施し、右まわりに移動反復するが、口縁部近くは板の擦痕によって消している。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好。色調は黄褐色をなす。

Fig.29－1は壺形土器Ⅱ類に分類できる中型壺である。胴中位から下半にかけての破片である。胴部最大復原径24.8㎝を測る。器体外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、ヘラ研磨はやゝ粗雑である。全面丹塗りされるが発色は良くない。黒斑がある。内面は横位～斜位（右→左上）の貝殻条痕調

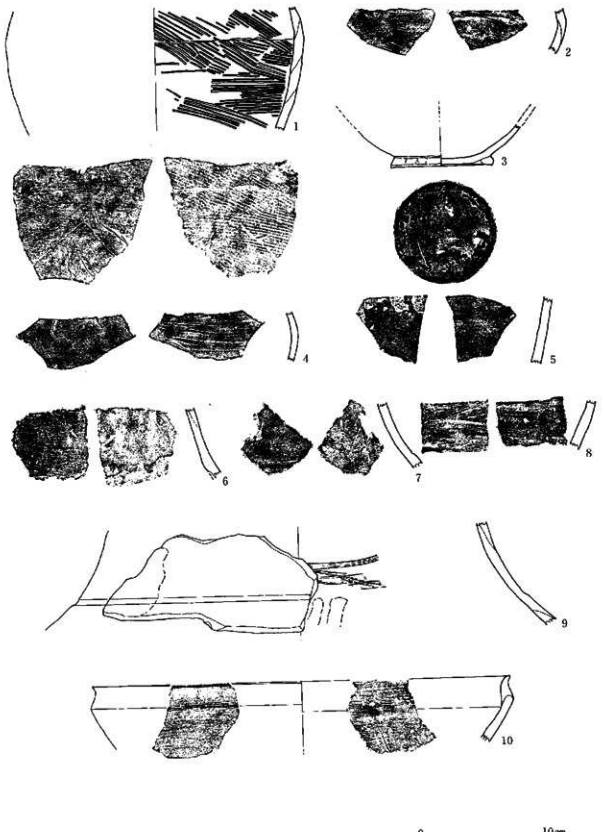


Fig.29 下層出土土器実測図V

整で、底部から口縁部に向って帯状に施し、それを左まわりに反復移動させている。また、貝殻条痕の上から板ナデを加えている。胴部最大径部分に粘土接合部があり、内面にはその痕跡が明瞭に残っている。粘土帯の幅は2.5㎝前後である。内傾に接合する。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は良好。色調は外面は丹塗りで、下地は白黄色～黒色をなし、内面は黄褐色をなす。2は中型壷の胴中位の破片である外面には化粧土をかけ、横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内面は横ナデ調整である。粘土帯の接合部分が凹みとして線状に残っている。外傾接合である。胎土は精製され良質、胎土の色調は黒灰色で、化粧土部分は白黄色をなしている。焼成は堅緻、色調は外面が黒灰色、内面が黒色をなす。3は中型壷の底部である。底部は端部が外に張り出し低い台形状をなす。外底部は周縁部から内側に向ってヘラ削り調整が加えられ、やゝあげ底状をなす。体部は外側に大きく開きながらたちあがる。内外面共横方向のヘラ研磨調整。底部径8.3㎝、底部高0.8㎝を測る。この底部の製作法は、まず、底部が丸底状につくられ、そこに粘土紐を輪状に貼り付け、体部との接点部を指で押さえ、ヘラで調整するために、低部端は外側に張り出す形状となり、外底部も体部との接点部を内側に向って調整するために、やゝあげ底状になる。板付Ⅰ式土器の円盤形底部の祖形をなすものである。胎土には精製され良質。焼成は堅緻である。色調は外面が黒褐色、内面は黄褐色をなす。4は中型壷の肩部破片と考えられる。外面には非常に丁寧なヘラ研磨調整を加えている。内面は刷毛目調整後、板による丁寧な横ナデを加えている。器壁が薄く、良質の土器である。胎土は精製され良質。焼成は堅緻、色調は外面は黒灰色、一部黒斑がある。内面は黒褐色をなす。5は中型壷の胴部破片。内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質、焼成は堅緻、色調は内外面共黒灰色をなしている。6は大型壷の頸部破片である。外面は横方向のヘラ研磨調整、ヘラ研磨痕には細い条線が認められる。内面は指圧痕が明瞭に残っている。上に斜位のヘラ研磨を加えているが、凹凸が著しい。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が白灰色、内面が黒色をなす。7は中型壷の頸部～肩部にかけての破片である。頸部と胴部の境に浅い沈線をめぐらしている。外面前面が丹塗りされているが、かなりはげ落ちている。内面には縦位、横位の刷毛目痕が部分的に残っているが、大部分は横ナデによって消されている。胎土には砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面の丹塗りの下は黄白色、内面は赤黄色～褐色をなす。8は大型壷の胴部破片。外面は板によるケズリ状の調整を横位に施している。全面が丹塗りされるが、丹の残りは悪い。内面は横ナデ調整である。胎土には砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面の丹塗りの下が白黄色、内面が赤黄色をなす。9は大型壷の頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に太く浅い凹線が入れられている。外面は横方向、斜位のヘラ研磨調整。一部に黒色の付着物がある。内面には指圧痕が残るが、上から研磨が加えられている。頸部には板状のもので横方向の擦痕がある。粘土帯の接合は外傾接合である。胎土には少量の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は黄褐色をなす。10は復原口径33.0㎝、体部上部で屈曲し、口縁端部が小さく外反する。口唇部は丸くおさめている。屈曲部には稜線がつく。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胎土には少量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共褐色をなす。

Fig.30　1、2は口縁部に刻目突帯をもつ壺形土器Ⅰ類の口縁部破片である。1は突帯が口縁端に接して貼り付けられB類に属する。刻目は棒状工具で施文されている。外面は板状のもので横ナデしている。突帯以下にススの付着が著しい。内面は横ナデ調整。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面が褐色～黒色、内面は黒褐色をなす。2は突帯が口縁端よりやゝ下ったところに貼り付けられ、A類に属する。口縁端部はヘラナデによって平坦にされ角ばっている。突帯は幅広く低い。刻目はヘラで刻まれている。外面は横方向の貝殻条痕調整。内面は横方向の貝殻

条痕調整を加えた後、ナデ調整を加えている。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は赤褐色をなす。3は中型壷の胴部破片である。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、内面は板状の工具で横ナデ調整を加えている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黒灰色をなす。4は甕形土器Ⅳ類の破片である。屈曲部の刻目突帯は断面三角形、刻目は棒状工具で施され、刻目には細かい条線が縦位に観察できる。外面の屈曲部より上は横方向の貝殻条痕調整。屈曲部より下は横方向の貝殻条痕調整を加えた後、さらに横ナデ調整が施されている。内面は横方向の貝殻条痕の調整を加えた上に、板状工具による横ナデを施し条痕を消している。外面にはススの付着が著しい。胎土には少量の砂粒が混入される。焼成は良好、色調は外面はススのため黒色であるが、ススの下は黒褐色をなす。内面は赤褐色をなす。5は甕形土器の胴部破片である。外面は斜位～縦位のヘラ削り状の調整。内面は横方向の板状工具によるナデを加えているが、やゝ粗雑である。粘土接合部が線状に明瞭に残っている。粘土帯の接合は内傾接合である。胎土には砂量を混入している。焼成は良好、色調は外面が灰褐色、、内面は黄褐色をなす。6は中型壷の胴部の小破片である。外面は丁寧なヘラ研磨調整で表面に黒色の顔料が塗られていて光沢をもっている。内面は丁寧に横方向のヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質。焼成は堅緻、色調は外面が黒色、内面は黒褐色～黒色である。7は壷形土器あるいは浅鉢形土器の胴部破片。器壁はきわめて薄い。外面は横方向の貝殻条痕調整の上に、縦位の丁寧なヘラナデ調整を加え、貝殻条痕を消している。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質、焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。8は浅鉢形土器の底部に近い胴部破片である。内外面共、丁寧な横方向のヘラ研磨調整を加えている。胎土には細い砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻、色調は外面が灰褐色、内面は灰色～黒色をなす。9は大型壷の胴部破片、外面は横方向～斜位の丁寧なヘラ研磨調整。丹塗りされているが、発色が悪い。一部、黒色の付着物がみられる。内面はヘラ状工具で横方向にヘラナデされている。胎土には砂粒が混入されている。焼成は良好、色調は外面が赤褐色～黒褐色。内面は黒色をなす。10は中型壷の胴部破片である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横方向の貝殻条痕調整を加えている。胎土は精製され良質、焼成は良好である。色調は外面が灰色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。11は大型壷の胴部破片とみられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。研磨痕には細い条線が認められる。内面には横方向の貝殻条痕調整を加えている。粘土帯の接合は内傾接合である。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色～黒褐色をなす。12は中型壷の胴部破片である。復原径は22.0cmを測る。外面は横方向の貝殻条痕調整を全面に施し、その上に赤色顔料を塗布し、横方向～斜位のヘラ研磨調整を加えているが、条痕部に顔料がたまりこんで、条痕が逆に目立っている。ヘラ研磨痕には細い条線が観察できる。一部に黒色の付着物がみられる。内面は横方向の貝殻条痕を施し、その上に板状工具によって横ナデを加え、条痕を消そうとしているが、下位には条痕が残っている。板ナデには細い条線が観察できる。内面にも黒色の付着物が認められる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤色～黒褐色、内面が黄灰色をなす。13は大型壷の肩部破片である。頸部と胴部の境に浅い凹線をめぐらしている。肩が張る器形とみられる。外面は横方向のやゝ粗いヘラ研磨調整、内面は指圧痕が凹部として明瞭に残っている。その上に縦位の板ナデ調整が加えられている。外面は丹塗りされている。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が赤色～黒色、内面は黄白色をなす。14は大型の甕の胴部破片である。外面は縦位～斜位の粗いヘラ削り状の調整。ススの付着が著しい。内面は横方向～斜位の貝殻条痕調整を加え、その上に板状工具によってナデ調整が施されている。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は黄灰色をなす。15は中型壷の胴部破片。器壁は薄く作りの良い土器である。

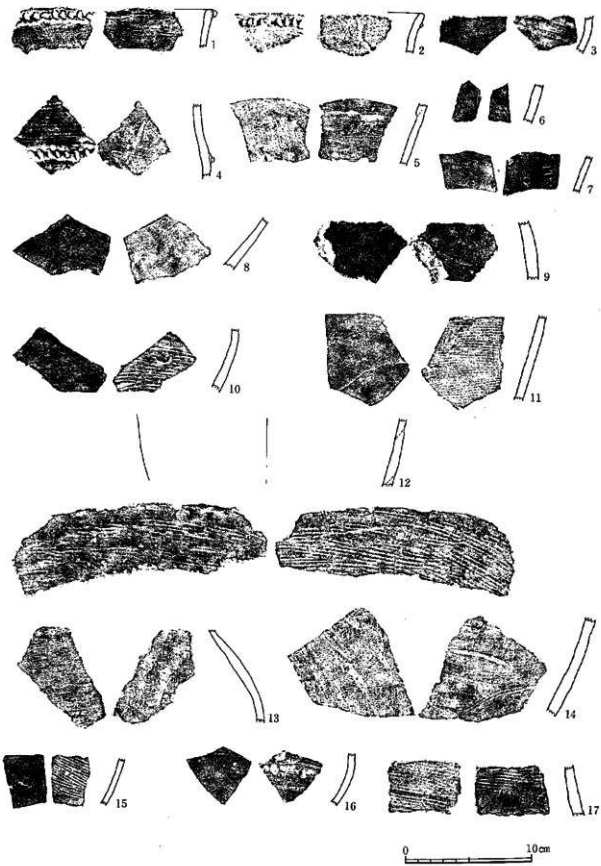


Fig.30 下層出土土器実測図VI

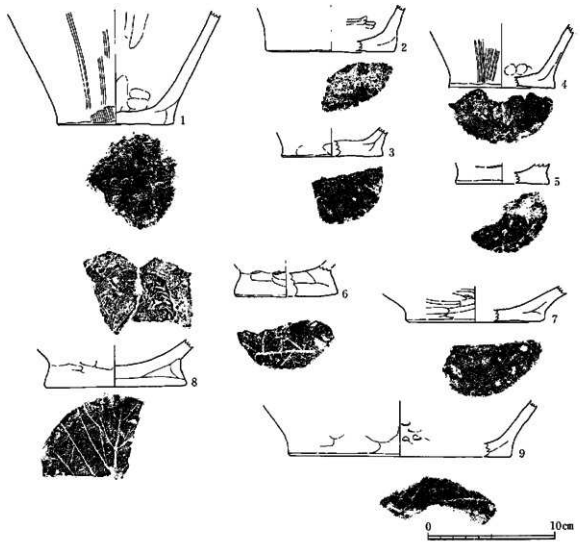


Fig.31　底部実測図

外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横位～斜位の貝殻条痕調整を加えている。胎土は精製され良質。焼成は良好。色調は外面が黒灰色、内面が黒色をなす。16は中型壺の胴部破片である。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横方向の板ナデ調整。細い条線が観察できる。胎土には少量の砂粒が混入されるが良質。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は灰褐色をなす。17は大型壺の肩部の破片である。頸部と胴部の境は不明瞭。外面は横方向の貝殻条痕調整を施し、その上に板ナデ調整を加え、条痕を消している。内面は上半に横方向の貝殻条痕を施し、その上に横ナデ調整を加えている。下半は横ナデ調整である。外面に黒斑がある。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は内外面共に白黄色をなす。

Fig.31は底部の破片である。一部、上層出土の甕形土器の底部も含んでいる。1は底部復原径9.2cm、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外底部には植物（？）の圧痕がみられる。体部外面は縦位の細い刷毛目調整が施される。内面はナデ調整で、内底部の周辺には指圧痕がある。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面が灰褐色をなす。2は底部復原径10.2cm、全体に保存状態が悪く、表面が剥離している。内底部に焦げつきがみられる。胎

土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面は灰褐色をなす。3は底部復原径8.0cm。外底部、体部外面にススが付着する。内底部には焦げつきが認められる。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～灰褐色、内面は黒褐色をなす。4は底部復原径8.4cm。わずかにあげ底状をなす。体部は外傾しながら直線的にたちあがる外底部はヘラナデが加えられる。体部外面は縦位のナデが施され、細い条線が観察できる。内底部には指圧痕が残り、内面はナデが認められる。外面にはススが付着し、内面には焦げつきがみられる。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～灰褐色、内面は白灰色をなす。5は底部復原径7.4cm、底部端がやゝ外に張り、底部は円筒状をなす。外底部は削り状の調整、外面は横ナデ調整。内底部には焦げつきがみられる。体部は粘土接合部で剝離している。粘土帯の接合は内傾接合である。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。6は底部復原径8.2cm。底部端は外に張り出し、断面形は台形をなす。高さ1.9cmを測り高い。外底部には木葉痕が明瞭についている。外面は板ナデ状の擦痕が多方向についている。内底部も板ナデ調整である。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共灰白色をなす。7は大型壷の底である。円盤貼り付け状をなし、高さ0.7cmを測る。外底部は多方向のヘラ研磨調整で、やゝあげ底状をなす。器体は大きく外に開く。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面はナデ調整。底部復原径11.0cmを測る。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好である。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面は灰白色をなす。8は6と良く似ている。底部端は外に大きく張り出し、断面形は台形状をなす。高さ2.1cm、底部復原径11.4cmを測る。外底部に木葉痕が明瞭に残っている。底部外面はナデ調整。体部外面は縦方向の削り状の調整。内底部は貝殻条痕調整を施し、その上に板ナデ調整を加えている。胎土は砂粒を混入しているが良質。焼成は良好。色調は内外共に黄白色をなす。9は大型壷の底部破片。底部復原径17.6cm、外底部には木葉痕が残っている。体部は外傾しながらたちあがり、長胴になると考えられる。外面には丹塗りされるが、ほとんど剝離している。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共灰白色をなす。

石庖丁出土状況（Fig.33）

G－7b調査区、下層水田面より石庖丁1点が出土している。3片に割れているが、3片共接合する。幹線水路と水田を限る大畦付近に投げ捨てられたような状況を示している。畦畔のすぐ横に石庖丁の先端部が、それから、約60cm西に離れて孔の部分を含んだ破片があり、それから約10cm離れて前者に接合する破片がある。後述するように、本資料の最終使用時には欠けた状態であったことを考えれば、この出土状況は、この石包丁を使用中、残りの孔の部分で欠けたため使用不能となり、使用者が、少しおこりながら割れた石包丁を畦に向ってほうり投げたと推測できるが、うがった見方であろうか。

石庖丁（Fig.32）

石庖丁は頁岩を素材として作られている。元来は、長さ約16cm、幅6.5cmの三角形をしていたと考えられるが、刃部中央部は使用による摩耗が認められ、丸くなり、現在では三日月形をしている。中央部の背から2cmのところに並列して2孔が穿たれている。孔間（心心）は2.8cm、孔径は0.5cmを測る。孔は両側から穿孔したもので、最初は敲打によって凹みをつけるが、凹みの径は約1cm、最終的に錐によって穿孔している。孔の凹みには敲打痕と錐の擦切痕が残っている。背は剝離痕がみられるが丁寧に研磨し、剝離痕は磨滅によってなめらかになっている。刃部は両面から研磨さ両刃であるが、

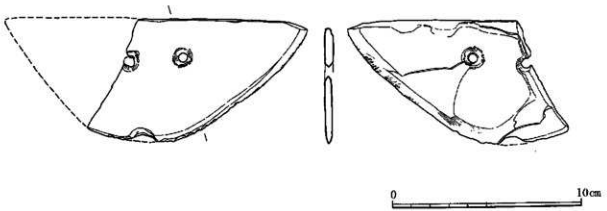


Fig.32　石庖丁実測図

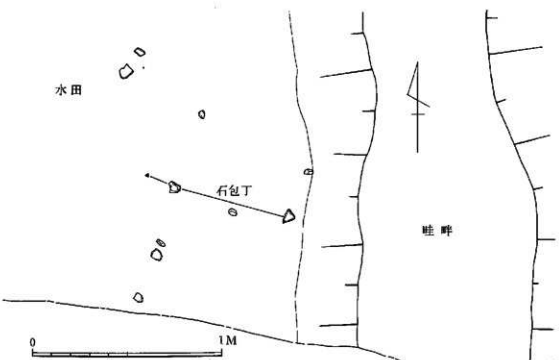


Fig.33　石庖丁出土状況

刃部には細かい刃こぼれがみられる。片側の孔から先端までを欠損するが、ほぼ左右対称になっている。厚さ0.4cm、板状に剝離している部分がある。破損部の割れ口は再利用するため研磨されている。

第5章　まとめ

今回、遺物の出土状況、および出土遺物について報告したG－7a調査区、G－7b調査区やG－7a調査区の西側に設定したトレンチ、G－7c調査区、さらに、G－6a調査区、F－8c調査区の調査は我国における稲作農耕起源の問題について多くの重要な成果をもたらした。これまで、その成果の一部は公表してきたが、ここでは改めて、出土遺物について、若干のまとめをしておきたい。なお、土器編年については、「弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合－」『古文化論攷』1980年にG－7a、7b調査区の成果を活用し、展開させた。ここでは、G－7a、7b調査区の成果に、その後、環境整備を伴って調査した環濠の成果を加味して、板付遺跡における土器の編年をみていくことにする。

1．土器編年の概要

本調査区の成果は、これまで明らかにできなかった刻目突帯文土器単純層を確認しただけでなく、刻目突帯文土器を重層する遺構に伴って Ⅲ期に細分することができたことである。また、この細分のもっとも新しい刻目突帯文土器に板付Ⅰ式土器が共伴することを確認した。この成果をもとに、刻目突帯文土器を下層から順番に夜臼Ⅰ式、夜臼Ⅱa式、夜臼Ⅱb式として分類した。夜臼式の名称は学史的名称として残したもので、夜臼式の細分をやったものではない。従来の夜臼式土器とは明らかに型式分類できるものであり、従来の夜臼式土器は夜臼Ⅱb式とした型式に相当し、板付Ⅰ式土器と共伴する。夜臼Ⅱa式土器は刻目突帯文土器単純期であるが、資料的に少なく、夜臼Ⅱb式との差は、夜臼Ⅰ式と夜臼Ⅱa式との差ほどないために小期としての細分にとどめた。以下、それぞれの型式の概略についてみていこう。Fig.34はG－7a調査区、G－7b調査区の上層、中層、下層の出土土器をまとめたものである。

上層出土土器（板付Ⅰ式土器、夜臼Ⅱb式土器）

台地際の幹線水路および取排水溝出土土器を標式とする。先述したように、幹線水路西側の自然堤防上の樹木の年輪から、その存続期間は30年前後と考えられる。祭祀土器の一群である。板付Ⅰ式、夜臼Ⅱb式の二型式がある。

板付Ⅰ式土器

弥生時代前期初頭の土器。板付遺跡の環濠出土土器を標式として、森貞次郎氏によって型式設定された。甕形土器Ⅱ類、Ⅳ類、小型壷、中型壷、大型壷、深鉢形土器、高坏形土器等の器種があるとされる。この土器型式の特徴は甕形土器の如意形口縁、小型壷に良く反映されている。換言すれば、甕形土器は如意形に口縁部が外反し、口唇部の刻目は全面に的確に施される。体部は張らず直線的で、外面調整として細かい刷毛目が縦位に施されている。胎土には多量の砂粒を混入している。小型壷は、口縁部はわずかに外反し肥厚させ、その下端に段を形成する。頸部と胴部との境にも明瞭な段が形成され、相対する内面の粘土接合部も特殊な段として残っている。胴部は球形をなす。胴部と底部の境も明瞭で、底部はいわゆる円盤貼り付け状をなしている。胴部上半には彩文や細沈線によって有軸羽状文や複線弧状八字形文等の文様が描かれる。胎土は精製され良質で、一見してそれとわかる。中型・大型壷も同様の特徴をそなえているが、大壷には文様はきわめて少ない。以上が板付Ⅰ式土器を

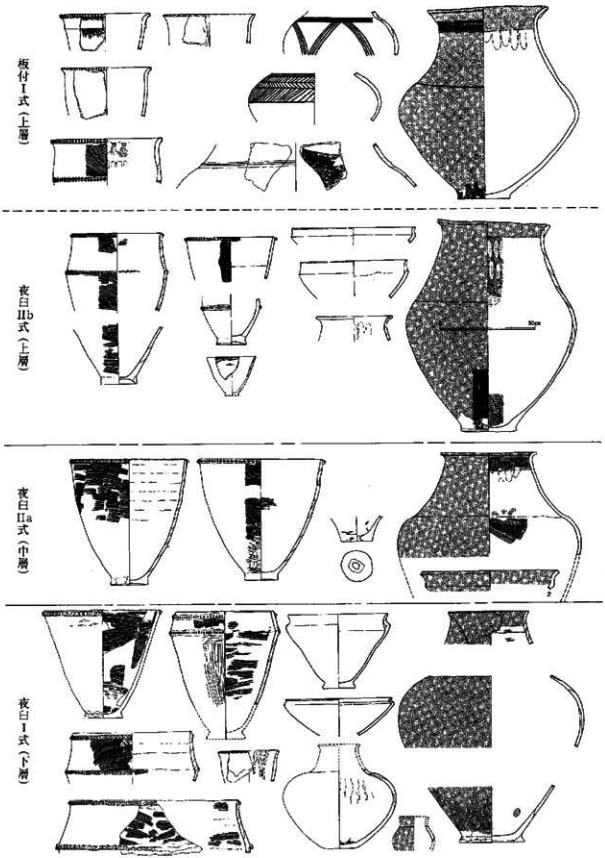


Fig.34　G−7a・7b 調査区出土土器の編年

判別する指標とされてきた。特に小壷の特徴は判別しやすい点、共通の理解となっている。しかし、最近、調査が増加する中で、矛盾も生じてきた。例えば、明らかに板付Ⅰ式土器より後出する甕棺に板付Ⅰ式土器の特徴をそなえた小壷が副葬されている例が多くあり、これらの小壷の時間的幅の問題が出てきている。また、それに関連して、環境整備で発掘調査した環濠の所見では、上記の特徴をもった小壷は、最下層から前期後半にいたる各層位にわたって出土している。また、森貞次郎氏が板付Ⅰ式土器の大壷として提示された中には、明らかに板付Ⅱ式土器が含まれており問題視されていた。これらの矛盾は板付Ⅰ式土器の再検討を余儀なくしている。今後、環濠の出土遺物を加えて検討する予定であるが、G－7a、7b調査区の板付Ⅰ式土器は、その単純な姿として把握することができるものである。G－7b調査区幹線水路出土の完形の大型壷やG－6a調査区の幹線水路の延長部から出土した大型壷は、器形的には板付Ⅰ式の小壷を単純に大型化させたものであることからも傍証できよう。

夜臼Ⅱb式土器

これまで夜臼式土器と称されていた土器型式である。夜臼遺跡出土土器を標式として森貞次郎氏によって設定された型式であるが、資料が少なかったため、改めて板付遺跡出土資料からセット関係が示されている。器種は甕形土器、壷形土器、浅鉢形土器、高坏形土器等がある。甕形土器には口縁に一条の刻目突帯をもち直口する器形のものと、胴上半部でくの字形に屈曲し、口縁と屈曲部にそれぞれ刻目突帯をもつものと、刻目突帯をもたず直口する器形の三種類がある。器面調整は条痕を施した後、ナデによって消される傾向が強い。一部には条痕のかわりに刷毛目調整を施すものがあり、条痕も細いものが縦方向に施されるものが多くなり、調整にも板付Ⅰ式土器との融合がみられるものがある。壷形土器は大型壷の破片のみである。幹線水路の延長部分であるG－6a調査区からは夜臼Ⅱb式の大壷の完形品が出土している。口縁部は外反し、頸部はゆるやかに下り胴部との境は不明瞭、胴最大径は胴上半部にあり長胴化する。底部は平底で、端部をわずかにつまみ出し台形状をなす。外面と口縁部内側に帯状に焼成前の丹塗り研磨を施す。下地の調整は刷毛目調整。夜臼Ⅱb式の典型的な大壷である。浅鉢形土器は縄文晩期の黒色磨研の浅鉢形土器の系譜を引いた最終形態を示している。すなわち、器形は体部上半で稜線をもって屈曲し、ゆるやかに反転し口縁部はわずかに外反する。器面は良く磨研されている。甕形土器、壷形土器、浅鉢形土器の底部は凹筒状～円盤状をなすものが増加する。

中層出土土器（夜臼Ⅱa式土器）

刻目突帯文土器の単純期であるが、極めて出土遺物が少ない。G－7a、7b調査区には甕形土器、浅鉢形土器、大型壷がある。下層土器とは明瞭に区別できるが、上層の刻目突帯文土器とは下層土器ほどの差がないため夜臼Ⅱa式として小区分した。甕形土器の底部は下層土器が端部が台形状に張り出すが、端部端にあわせて粘土が充填され、円筒状になり、板付Ⅰ式土器の甕形土器に近似してくる。器壁外面に施された横方向の貝殻条痕は胴部下半をナデ消している。口縁部に一条の刻目突帯を貼りつけた直口の器形が出土しているのみであるが、当然、胴部が屈曲し、口縁部と屈曲部に刻目突帯を貼りつけた二条突帯の土器も存在する。他遺跡例でみると、下層土器より屈曲の度合いは小さくなる。大型壷の器形は口縁部が大きく外反し、端部は丸くおさめている。頸部はゆるやかに下り、頸部と胴部の境はいまだ明瞭であるが、下層土器ほど胴部は張らない。底部はないが平底をなすものであろう。外面と口縁部内側を帯状に焼成前の丹塗り磨研するのは下層上器、上層土器と同様である。浅鉢形土器は良好な資料がないので、判然としないが、口縁部の外反がより強いものがある。この時期の良好な遺跡の例が増加しつつある。南区野多目遺跡のSD－01の上層土器、早良区有田七田前遺跡出土土

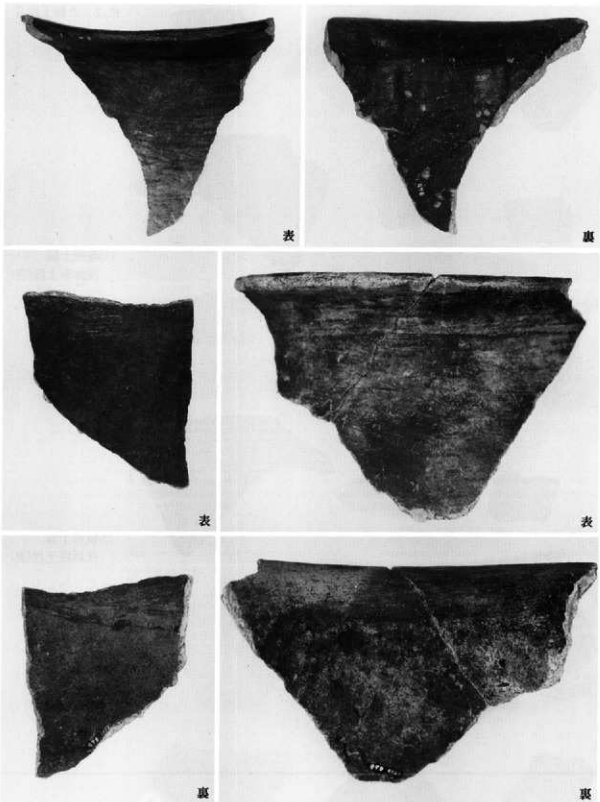
器はこの時期の典型例である。刷毛目調整や彩文土器の出現はこの時期に求められるが、板付Ⅰ式土器との関係は今後、充分に検討する必要があろう。

下層出土土器（夜臼Ⅰ式土器）

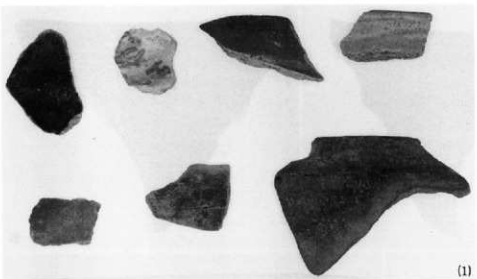
刻目突帯文土器の単純期で、出土遺物も多い。G－7a・7b調査区出土土器の器種には甕形土器、壷形土器、鉢形土器、浅鉢形土器があるが、高坏形土器は出土していない。甕形土器は口縁部に刻目突帯をもち直口するものと胴上半部で屈曲し、口縁部と屈曲部の二ケ所に刻目突帯をめぐらす二条突帯のもの、刻目突帯をもたず、口唇部に直接刻目を入れるものの三種類がある。刻目突帯は口縁端よりやゝ下った所に貼り付けられるA類に属するものが多い。器壁の内外面には横方向の貝殻条痕調整が著しく（一部にケズリによって条痕を消す場合もある）、突帯の刻目も太く深く刻む例が多い。底部は端部が外に張り出し、断面形は台形状をなし、高く安定感がある。胴上半部に屈曲部のある甕形土器の屈曲度合は中層・上層土器に比較し強い。壷形土器は小型壷、中型壷、大型壷の三種類がある。小・中型壷は口縁部がわずかに外反し、頸部はゆるやかに外にひらきながら下り、頸部と胴部の境は大きく屈曲し、胴部は張るが、板付Ⅰ式のような明瞭な段はなく、内面の粘土接合部の段の状況も大きく異なっている。底部は平底に近い丸底と平底の二種類がある。両者は形態的には大きな違いがあるが、製作的に非常に近い関係にある。平底は丸底の底部に粘土紐を輪状にまわし貼りつけたもので、底部端は外に張り出し、断面形は低い台形をなす。この平底は板付Ⅰ式土器の円盤貼り付け状の底部の祖形をなすものである。底部端と器壁の間に埋土を充填すると容易に円盤貼り付け状の底部が形成される。この間の事情を示すのはFig.16－4に示した板付Ⅰ式壷の底部粘土接合痕の状態である。胎土は精製された良質の粘土を使用し、器体外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。内面には貝殻条痕を残すものもみられるが、ヘラナデで消している。大型壷にみられるような丹塗り磨研をもつものは極めて少ない。彩文や細沈線の文様をもつものはない。大型壷は、口縁部がわずかに外反し、頸部はゆるやかに傾斜しながらひろがり、頸部と胴部の境は明瞭である。肩が張り、胴部最大径は上位にある。底部は端部が外に張り出し、断面形は台形状をなす。このやり方は小・中型壷と同様である。大型壷のほとんどは、外面と口縁部内面に帯状に焼成前の丹塗り磨研が加えられる。小・中型壷に比較し、胎土は良くない。壷形土器の粘土帯の接合は外傾接合が多く、内傾接合は少ない。この粘土接合のあり方は、甕形土器、浅鉢形、鉢形土器の場合とは対称的である。浅鉢形土器、鉢形土器は縄文時代晩期の黒色磨研土器の系譜を色こく残している。体部上半で稜線をもって屈曲し、反転しながらたちあがり、口縁端部が短かく外反する。特にFig.26－11に示した浅鉢形土器は晩期浅鉢形土器からの変化を良く残している。底部は他と同様に断面形が台形状をなし安定感がある。高坏形土器は確認されていないが、浅鉢形土器に脚台がついた形状となる。

以上が、G－7a・7b調査区の発掘調査成果から得られた土器編年の概要である。最近、発掘調査例が増加し、この時期の土器編年が多々問題となっているが、いまだ確定したものとはいえない。問題解決にいたらないのは、土器の系譜に関する立場の違いも大きな原因であるが、基礎資料の提示がおくれていることにも起因している。筆者の関係した板付遺跡環濠資料も整理した上で、すみやかに提示し、弥生時代開始期の土器の問題について再論したいと考えている。

図　版
PLATES



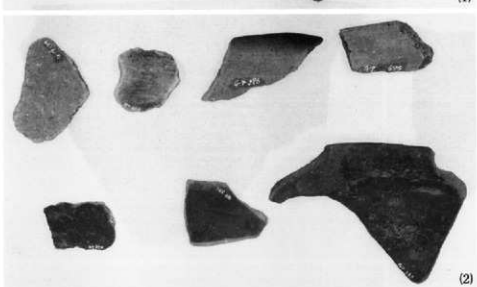
PL.1　上層土器Ⅰ　大型の壺形土器（板付Ⅰ式）



(1)

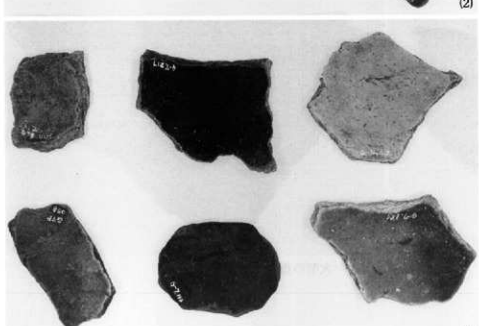
PL.2　上層土器Ⅱ

(1)壺形土器
浅鉢形土器(表)



(2)

(2)壺形土器
浅鉢形土器(裏)



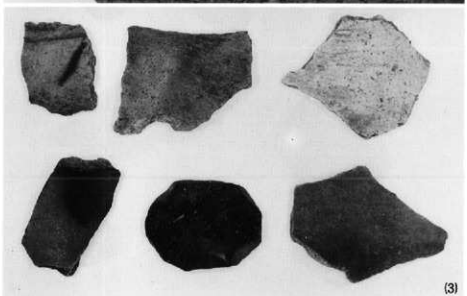
(3)

(3)壺形土器他(裏)

PL.3　上層土器Ⅲ

(1)板付Ⅰ式
壺形土器

(2)文様拡大

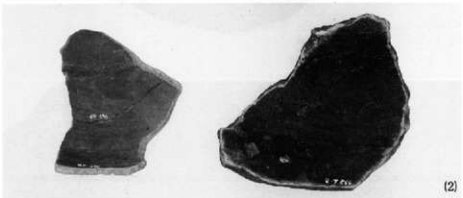


(3)壺形土器他(表)

PL.4　上層土器Ⅳ

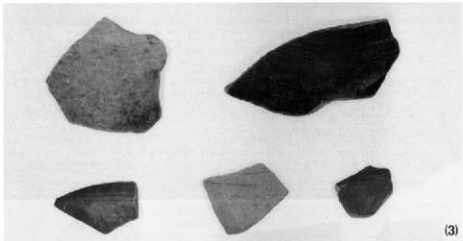
(1)

(1)壺形土器(表)
左 夜臼Ⅰ式土器
右 板付Ⅰ式土器



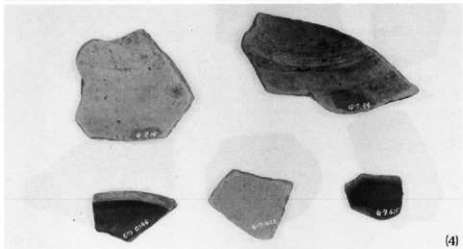
(2)

(2)壺形土器(裏)
左 夜臼Ⅰ式土器
右 板付Ⅰ式土器



(3)

(3)壺形土器
(板付Ⅰ式)(表)

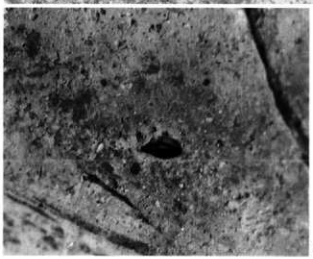


(4)

(4)壺形土器
(板付Ⅰ式)(裏)

(2)

(3)



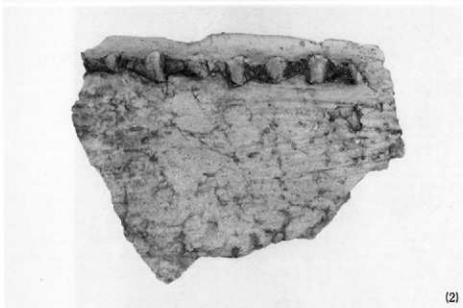
(4)

PL.5　中層土器
(1)甕形土器
(2)大型壷形土器
(3)大型壷内の刷毛目痕
(4)大型壷外面の籾圧痕

PL.6　下層土器Ⅰ
（器面調整）

(1)

(1)貝殻条痕



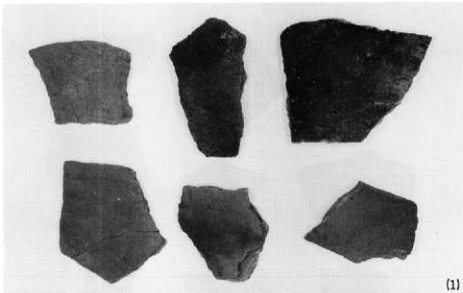
(2)

(2)貝殻条痕

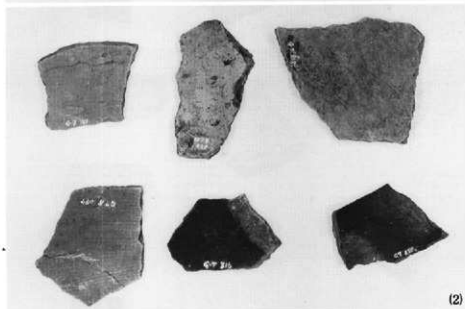
(3)

(3)板擦痕

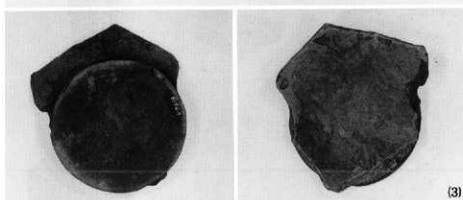
PL.7　下層土器Ⅱ



(1)甕形土器胴部
(表)

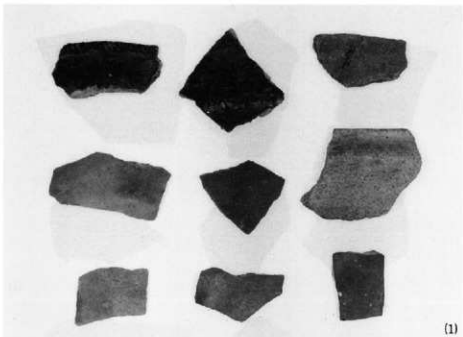


(2)甕形土器胴部
(裏)



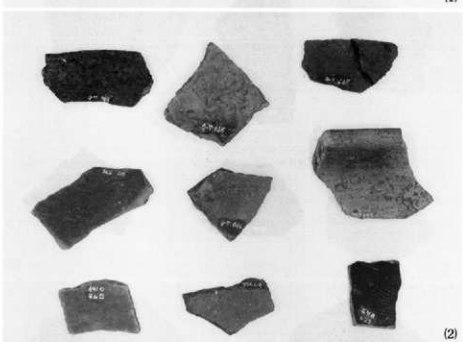
(3)臺形土器底部

PL.8　下層土器Ⅲ



(1)

(1)甕形土器
浅鉢形土器(表)

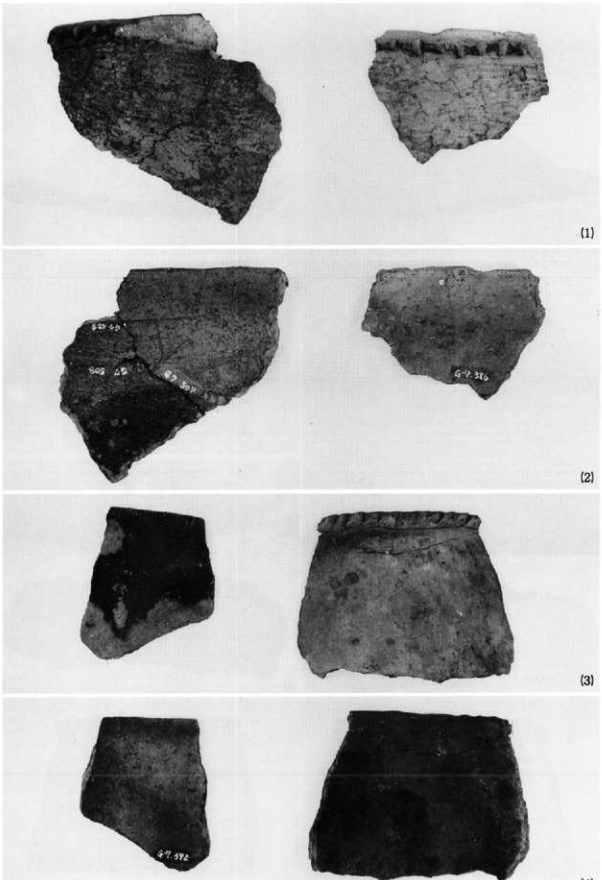


(2)

(2)甕形土器
浅鉢形土器(裏)

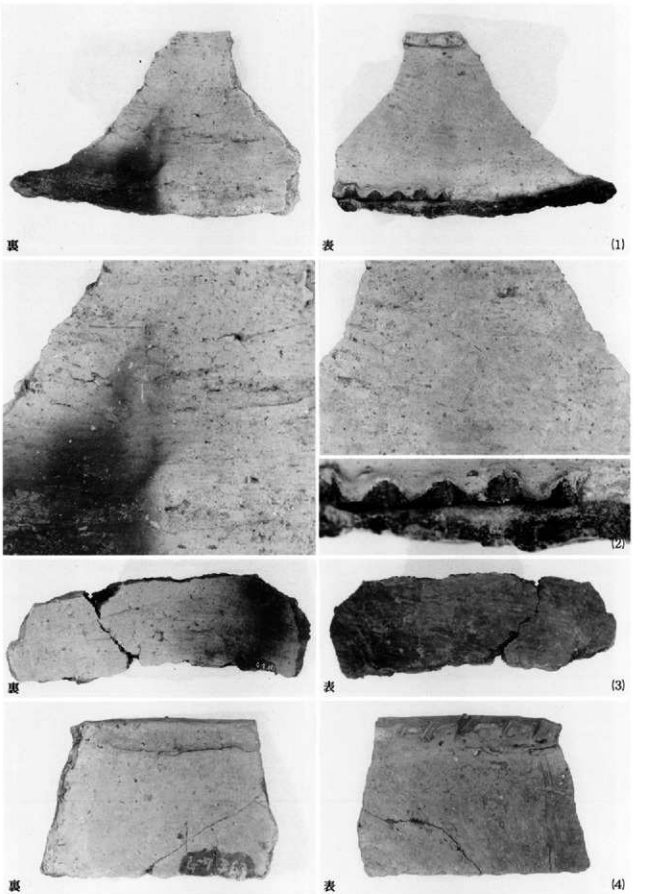
(3)

(3)甕形土器底部



PL.9　下層土器Ⅳ（甕形土器）(1)表　(2)裏　(3)表　(4)裏

PL.10



PL.10　下層土器Ⅴ　(1)甕形土器　(2)細部拡大　(3)壺形土器胴部　(4)甕形土器

福 岡 市
板付周辺遺跡調査報告書第21集

— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集 —

2000年（平成12年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　株式会社 エイコー社
福岡市西区周船寺三丁目19番９号